琉球大学学術リポジトリ

八重山歌謡に見える植物

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山里, 純一, Yamazato, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2378

八重山歌謡に見える植物

山里純一

はじめに

八重山の歌謡に見える方言名の植物については、喜舎場永珣氏の『八重山民謡誌』および『八重山古謡』、また宮良当壮氏の『八重山古謡』、上勢頭亨氏の『竹富島誌』、さらに外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』や最近あいついで出版された『竹富町古謡集』『石垣村古謡集』『登野城村古謡集』等でも、ある程度、和名・学名の同定や注釈がなされているが、全体を把握する試みはまだなされていない。そこで本稿では、古謡・節謡等に見える植物を可能な限り抽出し、八重山歌謡においてどのような植物がどのように謡われているかということを概観してみたい。歌謡は『八重山民謡誌』および『八重山古謡』を基本にし、それに収録されていないものに限って『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』やその他の資料から引用して掲げたが、対訳の一部に筆者の判断で若干表現を変えたものもあることをあらかじめお断りしておきたい。なお文中の歌謡の出典に付した頁数はその植物が出てくる箇所である。

一　歌謡の中の植物

（1）　木本類

あこう・あかぼー・うしく

和名はクワ科のアコウ、学名は Ficus superba Mip.var.japonica Miq. である。

石灰岩地域に生える高木で幹はよく分岐し、高さは十～二十メートルにもなる。葉は長楕円形で先はわずかに尖り、枝の先の方に集まってつく。無花果は球形で枝や幹に着生し、淡桃白色をしている。年に二回ほど落葉するがすぐに萌芽する。この木は「葉が三枚出たらマジムンが付く」といわれ忌み嫌われるため、屋敷内には植えないという。但し昔は、各村の出入り口に二、三本植えて、その周囲を石で囲み、集落の魔除けとしたらしく、現在も平得の入り口には大きな「あこう」が生えている。なおこの木は緑陰樹としてかっこうの休憩場所ともなる一方、気根や根が大きな石ばかりでなく、他の植物を抱きかかえ、その植物を枯らしてしまうため、俗に「しめ殺しの木」とも呼ばれている。

歌謡にこの植物が出てくるのは有名な「鷺ぬ鳥節」であるが、ここではその元になった「鷺ユンタ」（『八重山古謡』上巻七〇頁）の歌詞を掲げる。

大山ぬ中なんが　　大山の中に
長山ぬ内なんが　　長山の内に
大あこうぬ　生やうり　　大きなあこうの木が　生えている

実あこうぬ　さしようり　　実のなるあこうの木が　生えている
本見りや一本　　本を見れば一本だが
枝見りや　百枝　　枝を見れば百枝である
百枝んが　巣ばふい　　百枝に巣を構えた
八重枝が　巣ばふい　　八重枝に巣を作った

ところで、現在の石垣市の公設市場周辺は、昔は「やらぶ」「がじゅまる」「あこう」「くばでーさ」等の巨木が林立しており、それが東は「糸数御嶽」まで、西は「長崎御嶽」まで続き、こうした大森林地帯を人々は「長山」と呼んでいたという。喜舎場永珣氏の考証によれば、「鷲ユンタ」に見える大あこう木は、その「長山」に生えていたものである。

小浜で盆行事の時にのみ謡われる「平良とどろき」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』五六八頁）には、次のような歌詞がある。

安里はじまる松　　安里のがじまる松
松だきゅる　うしくや　　松を抱くウシク（あこう）
ひるましむぬさ　　珍しいものよ
うしく様ど　松にのゆる　　ウシク様が松に乗る
わんと思里とやよ　　松思いの男とは
なまからあんすんど　　今からはこうするよ

「うしく」という植物が安里のがじまる松にからみついているのを見て、自分もこれからは恋人とそうしたいと

謡われているが、ここに出てくる「うしく」は「うすくがじまる」の異名をもつ「あこう」のことである。

また黒島の家造りや結婚式などの目出度い祝いの座で謡われる「山樫根アユー」（『竹富町古謡集』七〇頁）に、

あかぼー木ぬ　根下りや　　あかぼーの木の根下りは
石やぱなんどぅ　根や下りる　　石の上に根が下りる

と見える「あかぼー木」も「あこう木」のことであろう。この古謡では、木はそれぞれ生えるべきところに根を下ろすように「ばがけーら（我々皆）」もしかるべき場所に根を下ろすと謡われる。同じ内容の古謡は小浜、新川、竹富にもあるが、「あかぼー木」のことを謡ったのはこの黒島の古謡のみである。

あさんぐる

和名はウコギ科のフカノキ、学名は Schefflera octophylla Harms. である。

シイ林に多く見られる常緑の高木。幹は直立し、高さ五〜十五メートル、直径三十〜八十センチくらいになる。葉は大型の掌状複葉で、六〜八枚の小葉に分かれ、枝先に集まってつく。枝先の方から複総状の傘形花序を出し、緑白色の花を密につける。実は丸く黒褐色に熟す。材は柔らかく、下駄や指物の材料となる。

この植物は、小浜の「山かしぬアヨウ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一六八頁）に次のように出てくる。

あさんぐる木ぬ　根下りや　　あさんぐる木の根下りは
山ぬ頂にと　根下りす　　山の頂に根が下りる

また宮良当壮氏が紹介している「山の木節」（『宮良当壮全集』11、五二一頁）には、

山の木の軽さあ　　山の木で一番軽いのは

あさんぐる木でむぬ　　あさんぐるという木である

とあり、「あさんぐる」が山に生育する木の中で最も軽いと表現されている。

あだん

和名はタコノキ科のアダン、学名は Pandanus odoratissimus L.f. である。

海岸近くに生える亜高木で、幹は太い枝を疎に分岐し高さ三～五メートルくらいになる。幹から多数の気根を垂れ、地面に届くと幹を支える支柱根となる。葉は堅い革質で、線状披針形。長さ一～一・五メートルほどもある細い葉の縁と裏面中肋上には鋭い刺がある。花は、乳白色で白っぽい苞につつまれて垂れ下がり芳香がある。果実は、集合果でパイナップルのような形をしているが、橙色に熟して甘い香りを放ち、ヤシガニの好物でもある。若い気根を細かく裂いて、乾燥させ縄を綯い、その細い縄を利用してアンツク（物入れ用のかご）等を作る。葉は刺を取り除き、ぞうりや帽子の材料として利用される。また、子どもたちの玩具すなわち「あだん」のカジマヤー（風車）も作られる。葉の基部の白くて柔らかい新芽の部分はアダニノフクと呼ばれ、豊年祭の時にこれで「スナイ」（みそあえ）をこしらえて神前に供える。八重山の開闢の伝説では、「あだん」の林の中から二人の男女が地上に生まれ出て、「あだん」の実を食べて生命をつないだということから、「あだん」は「生命の神木」ということになっているが、新芽でスナイをこしらえ神に捧げる習俗はこうした伝承を受け継いだものであろうといわれている（喜舎場永珣『八重山歴史』二二頁）。なお石垣島では法事に欠かせない食品であり、現在も日常的に売られている。

この植物は、黒島の「黒島口説」（大浜安伴『声楽譜附　八重山古典民謡　工工四』下巻九五頁）の囃子に見える。

イヤイヤ黒島女（くるしまみーどぅんたー）達が　　（イヤイヤ）黒島の娘たちは

昨夜ぬ浜下りさみえ　　昨夜の浜下りで
浜蟹取らんでぃ　　浜の蟹を採ろうと
足や高足　横足使とうてぃ　　高足、横足で歩いていると
アリアリあだんぬ中から　　（アリアリ）あだんの中から
大爪打ち振い振い　　大きな爪を打ち振っているので
あがきちゃあぶへい　　ビックリ仰天

すなわち「あだん」の実がヤシガニの好物であることから、「あだん」林の中にはヤシガニがその実を食べようと徘徊しており、黒島の乙女が思いもかけずにそれと遭遇してビックリ仰天した光景を面白おかしく謡った部分である。

なお、あだんの気根をあだなしというが、新城上地の「ざん取りユンタ」（『八重山古謡』下巻二九〇頁）には、島の若者があだに山に入って、あだなしを切り取ってそれを晒して網を作って漁船に載せ貢租品となっていたザン（ジュゴン）を捕獲しに行く様子が謡われている。

しるび山　まりゃ歩き　　しるび山を　さがし歩き
あだに山　まりゃ歩き　　あだん山を　探し歩き
あだなしば　切りとうし　　あだなしを切り取り
よなかじば　ぱきぃとぅし　　よなかじの表皮を剝ぎ取って

さらに、「あだん」の有用性を示すものではないが、「松金ユンタ」（『八重山古謡』下巻四三〇頁）にも「つぬ柱や　あだん柱　とぅる建て」と、あだんの幹を家の角柱に用いたことが謡われている。

「松金ユンタ」と称する古謡は各村にあるが、これはマチンガニという人のいわば出世物語で、貧しい家で育ったマチンガニが成長し、オモト山に登って木を切り出し家に運び、腕利きの大工に頼んでそれを用いて立派な家を造り、役人として出仕し最後は最高の頭職に就き、名声をとどろかしたという内容の古謡である。その中で、幼い頃の貧しい家について、掘立小屋で、角柱は「あだん」の柱、中柱は「ずぐ」すなわちデイゴの柱を建て、外の雨戸はなく藁の編み物でふさぎ、中の戸は葦竹を割って編んだものであるとしている。

あでふ

和名はフトモモ科のアデク、学名は Syzygium buxifolium Hook. & Arm. である。

マツ林やシイ林などに自生する常緑の高木で、幹は直立し、高さ十〜十五メートル、直径三十センチくらいになる。生育地によっては数多く分枝し、あまり高くならないものもある。樹皮は赤褐色で鱗片状に剝がれる。葉は楕円形で先はいくぶん円味をおび、表面はつやがあって互生する。春から初夏にかけて淡緑白色の小さな花が咲き、冬に丸い実が赤く色づき、後に紫褐色に熟す。材は非常に硬くて強いので、床の間の装飾用柱材、また鍬の柄や農機具等の把手に用いられる他、盆栽や庭木としても利用される。

この植物は、川平の「まゆんがなし」が唱える次の〈命果報〉のカンフチィ（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』二七頁）に見える。

うーとぉーどぅ　　ああ尊
くぬとぬち　ふうしゅまい　　この殿内の大主前
ぐすたれーまいぬ　　お姥上前の

いぬちんがぶ　ふーですーや　　命果報というのは
しいたきとん　まいたきとん　　後嵩を　前嵩を
くさでし　　腰当てにし
あでふき　こーでーき　かーばたき　　あでふ木　こーでー木　かーばた木
ちきすぬ　かふーで　　のように堅く丈夫な体でありますように
かんかざる　びんとぉーどぅ　　こう唱えます　ああ尊

ここでは「あでふ木」の堅さを人間の体の丈夫さに喩えている。

竹富の「ウンダマリジラバ」（『八重山古謡』下巻五七頁）は、継母の態度を気にして結婚が延び延びになっていたウンダマリという男が、叔父・叔母・仲人の協力を得てようやく結婚式を挙げ、まもなく子宝に恵まれ、子の成長を願うという内容の古謡であるが、その中にも「あでふ木」が見える。

内ぬ山　　深い山に
底ぬ山　　山奥に
走り入り　　走って行って
あでふ木や　　あでふ木は
叔父しょうり　　叔父が
まきゃ来でぃ　　採ってきて下さい

この古謡には「ずり茅や　仲立てぃし　まきゃ来で」（刈った茅は仲人が採ってきて下さい）とも謡われており、茅が家の屋根を葺くものであることから、叔父が採りに行った「あでふ木」も建築材であったと思われる。花嫁を

迎えるためには独立して家を構える必要があり、そのために叔父・叔母・仲人などが話し合ってそれぞれの寄贈分担を決め、叔父は「あでふ木」を採りに行くことになったのである。

いしぶ

和名はトウダイグサ科のシマシラキで、学名は Excoecaria agallocha L. である。

河口近くの汽水域に生えるマングローブ林に多く見られる亜高木で、幹は直立し、高さ三〜十メートルくらいになる。葉は長楕円状卵形で、先は尖り、長さ十センチ内外で、表面には光沢がある。花は葉のつけ根に房になって咲き、秋には黄色に変わる。果実はやや球形で、五〜八ミリほどである。なお葉や樹皮に傷をつけると乳液のような樹液が出るが、この液は有毒で、特に目に有害とされる。材は薪にしてもあまり燃えず、有用な樹木とはいえない。

この植物が見えるのは、黒島の「山樫根アユー」（『竹富町古謡集』七〇頁）が唯一である。それには、

いしぶ木ぬ　根下りや　　いしぶ木の　根下りは
じるとぅにとが　根やうる　　泥土に根は下りる

と謡われている。

いじょう

和名はツバキ科のモッコクで、学名は Ternstroemia japonica Thunb. である。

マツ林からシイ林にかけ広い範囲にわたって見られる高木。幹は直立し、高さ二十〜二十五メートル、直径一メー

トルにもなるといわれる。花は白く、葉の付け根に一～二センチの花梗を出してやや下向きに咲く。材は堅くて強く、シロアリにも強いので、すぐれた用材として重用された。

家の建築材にも使われるため、古謡でもそうした用例が多い。まず新築儀礼における租納の「家たかび」（『八重山古謡』下巻四五一頁）には、「きゃん木柱（ばら）　取りぃだし　いじょう柱（ばら）　切りぃだし」と見え、大川の「松金ユンタ」（『八重山古謡』上巻一七一頁）にも、

きゃん木柱（ばら）　　きゃん木の柱を
白み　いじょうば　　白身のいじょうの木を
取りぃ出だし　　切り出し

と見える。これらの用例からわかるように、「いじょう」は「きゃん木」の対語として用いられている。なお「松金ユンタ」では「白みいじょう」とあるのに対して、宮良の「桴海（ふかい）ぬ高ばんかーばんユングトゥ」（『八重山古謡』上巻四九八頁）や登野城のユングトゥ「桴海（ふかい）バナカーバナ筑登之（ちくどぅん）」（琉球大学八重山芸能研究会「第十一回　八重山芸能発表会パンフレット」一一頁）では、「赤みいじょう」「白みきゃん木」とあり、「いじょう」を赤目色としている

うかば

和名はマメ科のクロヨナで、学名は Pongamia pinnata Pierre である。

海岸近くの林内に生える高木。幹は直立し、高さ八～二十メートルくらいになり、いくぶん黒みを帯びている。葉は五～七個の奇数羽状複葉、小葉は卵形で先は尖る。枝の上方のつけ根から総状花序を出し、淡紅色の花を多数

咲かせる。花の後に長楕円形の扁平な実を多数つけ、後に黒く木質化する。葉は緑肥として利用される。

この植物は、宮良当壮氏が紹介したユングトゥ「金杖ぬ老人」（『宮良当壮全集』18、四七七頁、『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一二八頁）の中に見える。

滝やぐじゃんぐざる　　滝や（ママ）でこぼこの
ひや道から　　悪道を
どうと年な人ぬ　　たいそう年老いた人が
金杖つき　　鉄製の杖をついて
くぶるかし　ちゃんさみ　　〈不詳〉
うかば木ぬ　梢端に　　うかば木の梢の側に
実りや青　花や白　　実は青　花は白
くぬみ　　（青い実が実り、白い花が咲いている）
飛ぶ鳥鳩　　飛ぶ鳥・鳩が
其り食うん　　それを食べようと
彼り食うん　　あれ食べようと
どわどわし　　どわどわ（鳥のしぐさを形容した語）し
其り見るんで　　それを見ようと
彼り見るんで　　あれを見ようと
ふだがせえ　あぼうまかい　　危うく　穴ぼこに

落ちるんで　　落ちようと
あらぐだゆう　　していたよ

これと内容が似たものに、西表島網取の「早朝起きていよ朝ぱなぬユングトゥ」（琉球大学八重山芸能研究会「第三十回　八重山芸能発表会パンフレット」二九頁）、鳩間の「友利道ユングトゥ」（琉球大学八重山芸能研究会「第十七回　八重山芸能発表会パンフレット」一八頁）および竹富の「高那ユングトゥ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一四五頁）があるが、「うかば木」が見えるのはこの古謡のみである。

かしぃ

和名はブナ科のウラジロカシ、学名は Quercus salicina Bl. である。

山地に生える常緑の高木で、幹は直立し上方で枝を分岐して高さ十五メートル内外になる。葉は長さ二センチくらいの葉柄があり、小枝の先の方に互生して密につく。葉の先は細くとがり、縁には鋭い鋸歯がある。葉の上面は無毛でつやがあり、下面は粉白色を帯びる。果実の基部には盃状の殻（殻斗）がついている。首里城の柱材や梁材には、沖縄本島北部の杣山に植栽された樫木やきゃん木（イヌマキ）が用いられた。

この植物は、八重山の古謡の中では建築材というよりも船材としてよく出てくる。白保の「たな取りジラバ」（『八重山古謡』上巻五三五頁）は、船材を取りに入林し、樫木を切り出し、浜まで運搬するといった内容であるが、その中に「樫木に　当たりょうり　夫婦たな　当たりょうり」と、良材の樫木を見つけた様子が謡われている。

また黒島の造船に関するカンフチ（宮良賢貞『八重山芸能と民俗』二〇〇頁）にも、「古見岳　八重岳　七川越い出して来り樫木し造れーる御舟」と出てくる。

さらに長田大主の妹の真乙姥がオヤケアカハチの乱の論功行賞として尚真王から上国を命ぜられた際、それに向けて貢納船を造立する時に諸人が作ったというアヤゴ（『八重山古謡』上巻八頁）にも、

かし木たな　　樫木の船材の
赤ながね　　赤色のよき材をば
取らさせよう　　伐採すべく
取りはせい　　伐採してきた

と見える。

ところで、八重山の昔話には次のようなものがある。すなわち、絶世の美女が生まれ、役人にみそめられるが、これをすべて断って、一人でオモト山に逃げこんでしまう。空腹と喉の渇きに耐えられず川（池）の辺までやってきて、ついにそこで死んでしまう。すると片方の目からは樫の木、もう片方の目からはとぅむぬ木が生えてきて、それで船を造るが、最初に新造船に乗ったのが、女を所望した役人であったので、死んで船材になった女は、「どうせ乗せることになるのなら、生きている時に乗せればよかった」と、妾になることを承諾すればよかったと後悔する。

この昔話の元は、「いきぬぶしぃジラバ〈宮良〉」（『八重山古謡』上巻四九四頁）、「いきぬぶずユンタ〈登野城〉」（『登野城村古謡集』一四五頁）、「いきぬぼうじぃユンタ〈平得〉」（『八重山古謡』上巻三八四頁）、「ぱいさきよだジラバ〈波照間〉」（『八重山古謡』下巻六一四頁）「いきぬぶしジラバ〈大浜〉」（『大浜村の郷土誌』一八九頁）とそれぞれ呼ばれている古謡であるが、各村によって、生えてくる人体の箇所と樹木に相違が見られる。例えば、平得では「片目から　どぅすぬ木片耳から　とぅむぬ木」といい、登野城では「片耳から　松

ぬ木　片耳から樫木」、大浜では「片耳から　とぅむぬ木　片耳から　樫ぬ木」、波照間では「片目や　とぅむぬ木　くぬ目や　まとぅむぬ木」となっている。類歌は宮古にもあるが、池間の「池ぬぷーズとぅゆみゃぬアーグ」『南島歌謡大成　Ⅲ宮古篇』二七一頁では「片目からや　木ゆ生い　片目から　白さ根生い」となっており、特定の樹木の名は見えない。これに対して八重山の古謡では生えてくる樹木が謡われ、しかも村によってその樹木が異なっている点に特徴が見られる。しかしいずれの木にしても、船材として切り出されたのであるから、樫木が生えてきたとするのは歌意にかなっている。

新城下地には「古見山ジラバ」（『節祭ジラバ集』八三頁）と称される古謡が二種類あるが、その一つにも樫木のことが出てくる。

古見山に渡りょうり　　古見山に渡りなさい
八重岳に移りょうり　　八重岳に移りなさい
樫根木ば　切り下るし　　樫の木を切り出して
椎根木ば　ない下るし　　椎の木を切り出して
樫根木ば　しょんくばし　　樫の木で櫓を作って

と歌い出し、最後は富貴島・弥勒島に渡りなさいとなっている。野底氏によれば、新城島では近年までムヌンと称する物忌の行事があり、その日は牛馬とともに浜下りし、こしらえた小舟に害虫や鼠を乗せ、「この島には食糧が豊富でないから、富貴島・弥勒島に移動しなさい」といって海に流したという。いわゆるアブシバレーである。したがってこの古謡はそうした行事を背景に理解すべきものであるが、おもちゃの小舟をこしらえることを拡大して造船のための樫木のことが謡われているのである。

西表島祖納の「節祭」における「出船の歌」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』六一〇頁）にも、

船　　船は
樫の木ど　　樫の木の
船でござる　　船です

とある。

しかし樫木は、造船と関係した古謡にのみ見えるわけではない。例えば、波照間の「ばいさきよだジラバ」（『八重山古謡』下巻六一〇頁）では、ばいさきよだ（地名）に生まれたシカサマというしい女性が、古見の主の晴い女になったり、一般の人々の妻になったりしていることに対して、

山ぬ木ぬ　　山の木の
むむ枝とぅん　　百枝のようだと
なみられ　　噂され
かちぃ木ぬ　　樫木の
やしぃ枝とぅん　　卑しい枝のようだと
なみられ　　噂され

と、山の木や樫木の枝の分岐を誰とでも交わるシカサマという美女の比喩に用いている。

また新川の「山かしぃにアヨウ」（『八重山古謡』上巻三五頁）には、

山かしぃに　根下りや　　山かしぃ木の根下りは
山どぅにどぅ　根下りする　　山の低地に　根を下ろす

とあり、この木の根下りするところは山の低地であると謡われている。

樫木の果実を謡ったものもある。鳩間の「鳩間ユンタ」（『八重山古謡』下巻四〇四頁）には、

舟浦人ぬ　走り来ば　　舟浦の人がやってきたら
アディンガーぬ殻に　　アディンガー（樫木の果実）の殻で
神酒飲ましー　　御神酒を飲ませよ

と謡われている。オキナワウラジロガシの果実の大きさは、高さ三センチ、周り八～十センチもある日本一大きなどんぐりであるが、御神酒を飲む杯にしては小さすぎるし、質も良いとはいえない。実はこれには鳩間の人の舟浦の人に対する面当ての意味が込められている。すなわち、昔、鳩間島の人は島に田圃が無いため対岸の西表島の舟浦と上原地域に田地を借りて稲作を行なっていたが、毎年舟に稲・栗を満載して帰る光景は見事なものであった。それに比べて地元舟浦・上原の人々が耕作する田地からの収穫はあまり好ましくなく、このことに業を煮やした舟浦・上原の人々は自らの怠慢を棚に上げ、これは舟浦・上原の土地を鳩間島に貸していることに対する田の神の祟りであるとしてその土地の返還を求めた。これに鳩間の人は反発し係争が起きた。そこで西表村役人は蔵元政庁に指示を仰ぎ、結局、鳩間の人はこれまで借りていた田地を返し、新たにインダ・フクハマ・下離地域を開拓することになったが、皮肉なことにそこは従来の借地よりもはるかに良い土地であったという。（喜舎場永珣『八重山古謡』下巻　四〇七～四〇八頁）こうした背景があって、舟浦・上原の人に対して冷たくあしらっているのである。ちなみに上原の人がやって来たら「蛤の殻」で酒を飲ませて返せと謡われている。

がじまる

和名はクワ科のガジュマル、学名は Ficus microcarpa L.f. である。

海岸近くの隆起サンゴ礁石灰岩地域に見られる常緑の高木で、幹は直立し、高さ十～十五メートルくらいになり、ひも状の気根を垂らす。気根は地面に届くと幹のように太くなり大きな樹冠を作る。根や支柱根が大きな岩や他の植物を抱え込んだ光景もよく見られる。葉は長楕円形で、厚い角質表面はいくぶん光沢があり、先は鋭く尖り互生する。無花果は球形で径一センチ内外で、はじめ淡黄色または紅白色で、後に暗紫褐色に熟する。

昔は葉をスプーンの代わりに用いたり、草笛を吹いたりした。桑実結晶体を含んでいるので実験材料としても利用される。生長が早く、大きな緑陰を作るので、校庭や公園などに植栽され、生活の中で親しまれているが、一方では、キジムナー（木の精）が棲む木または神が降臨しやすい木ともいわれている。

歌謡の中では「がじまる木」の特異な根や支柱根の張り方が取り上げられている。

竹富の「びんに木ユンタ」（『八重山古謡』下巻七九頁）は、「びんに木」「すんむとぅ木」そして「がじまる木」の生え方を謡い、木の曲がりは矯正できるが、人間の曲がり（ひねくれた心）を治すことはできないという内容の古謡であるが、その「がじまる木」に関する部分は、

がじまる木ぬ　生いやよ　　がじまる木の生え方は
石ぬ上たゆりどぅ　生いやんせ　　石の上に生える

と謡われている。

民謡の「とーがにすざー」（大浜安伴『声楽譜附　八重山古典民謡工工四』九六頁）では、

あねるがじまる木ざぎどぅ　　あんながじまる木さえも

髭ば下れ　石ば抱ぎ　　気根を下ろして石を抱き
ふどぅべーいくさ　　生長していくでしょう
うらとぅばんとぅや　　あなたと私は
うら抱ぎ　ばぬ抱ぎ　　お互い抱きあって
ふどぅべーいから　　成長していこうね

と、「がじまる木」の根が石に根を張り生長する様子を、恋人同士が抱擁し愛情をはぐくみながら成長していくことの比喩として謡われている。

また大浜の「大浜がじまる節」(『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』五一六頁)には、

大浜のがじまるや　　大浜のがじまるは
枝持ちぬ美らさ　　枝持ちが美しい
大浜女童や　　大浜女童は
目眉ぬ美らさ　　容貌が美しい

とあり、枝持ちが美しいという特性を乙女の美しいことの比喩としているが、歌の形式は「石ぬ屏風節」の「くばでーさ」の一節と同じである。

かねーら・かにん

和名クマツヅラ科のハマゴウ、学名は Vitex rotundifolia L.f. である。

海岸の砂地に多く見られるほふく性の低木。幹は地上をはって長さ三メートルほどにもなる。小枝は四角形で白

色の微毛を密生させる。葉は倒卵形で紙質。裏面には灰白色の毛が密生していて幾分白っぽく見える。花は淡紫色をした小さなロート状花で頂生の円錐花序に多数集まって咲く。実は丸く、黄褐色に熟す。葉や材には独特の匂いがある。また葉には薬効があり、あせも等の皮膚疾患に効く。

この植物は、大浜の「野底浜ユンタ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』三七四頁）に次のように見える。

野底浜に生いだる　　野底村の浜に生えている
かねーら木ぬ　　かねーら木が
舟ぬ胴　取らりんとぅむよ　　舟の胴体として切り取られるまで
夫婦抜き　　夫婦は離別したり
かぬさ抜き　　愛しい人がいなくなったりしては
ならぬ　　ならない

この古謡は、大浜の他に、波照間、黒島にも「野底浜アヨウ」として謡われているが、夫婦の契りが不変であることを、どんなに年数を経ても決して到達できないであろうさまざまな事柄を比喩として挙げて強調したものである。それにしても、船の胴体に使用できるまで生長するはずもない「かねーら木」をわざわざ挙げているのは、永遠性を強調するためであろうか。

登野城の「あかんに田ユンタ」（『八重山古謡』上巻二九一頁）は、平得村のカネビラ（男）と真栄里村の女イジケーマがそれぞれ黒毛の馬と赤毛の馬に乗って名蔵のあかんに田に行き、ススキ叢・かねん叢の側で腕・股を交叉して寝ているところを、かねんぐし（馬の鞭にするかねんの小枝）を切ろうとやってきた大浜村のカナブザに見られてしまう。そこでイジケーマは、誰にも言わないで欲しいと御用布十尋を織ってあげたという内容だが、それに、

ゆすきむらし　　薄叢の
かにんきーぬ　　かにん木の
側なんが　　側に

と見える「かにん木」もハマゴウのことである。

きだ

和名はカキノキ科のリュウキュウコクタンで、学名は Diospyros ferrea Bakh. である。

低地から山地にかけて生える亜高木で多く枝分かれする。幹や芯材が黒色をしていることから「クロキ」の別名を持つ。葉は楕円形で硬い革質をなし、縁は全縁でいくぶん内曲する。春の頃、淡緑色の花が葉の付け根に付く。果実は楕円形で長さ一センチ内外。夏から秋にかけて黄色から赤く色づき、後に暗紫色に熟する。材質はきわめて緻密で堅重であり、磨けば美しい光沢を放つ高級な木材として床柱や三味線の棹に用いられる。近年は庭木や街路樹として植栽されるようになったが、地方によっては木が堅いのは人の精気を吸い取るからだといわれ、屋敷内に植えるのを忌み嫌う所もある。

この植物は竹富の「マンノウマ節」（『八重山民謡誌』二一二頁）に、

野ゆぬきぃだ　　野原に生えているきだ（のように）
本々しい　　もともとに
栄いし　　栄え

と見え、マンノウマ（真武能という役人）のおかげで村は繁栄していることの比喩として謡われている。なおこの

歌詞の部分は『竹富島誌』（一八二頁）では、

野ぬきだ本　　野の本のように
本し栄いし　　本にし栄え

となっており、「きだ」を槇と解している。しかし喜舎場永珣氏は、老司の語ったことにもとづいて「黒木の枝葉が繁茂するように村が繁盛した」と訳し、これを黒木に同定している。ここでは後者に従う。

「きだ」の用途を謡ったものもある。竹富の「牛ぬユングトゥ」（『八重山古謡』下巻一〇三頁）は、古見村のゆなだ家の牛を主人公とした擬人体の古謡であるが、穴に落ちてンブンブと泣いている私を助け、正月になったら私を屠殺して、肉を最上の高膳に載せ、「きだ箸」ではさんで年を取って下さいとある。黒木で作った箸は最も上等の箸とされた。

また新城下地の「古見山ジラバ」（『節祭ジラバ集』八三頁）にも、樫の木で櫓を作り、

きだぬずーば　ずまらばし　　黒木の芯で櫓をはめる突起を作って

と見える。

きゃんぎ

和名はマキ科のイヌマキ、学名は Podocarpus macrophyllus D.Don である。

雌雄異株の常緑高木で、高さは十～二十メートルにもなる。葉は扁平な線形で先端は尖り、上面は深緑色で下面は淡緑色をしている。果実は卵形で紅紫色の花托の部分は甘みがあり食べられる。材質は丈夫で、シロアリに強く、耐湿性に優れているため、建築材として用いられる。八重山では床柱としても重宝されている。山中に植林された

ものも、自生しているものも殆ど建築材として切り出されるため、大木はあまり見られない。近年、庭木や街路樹としてよく利用されている。

この植物は上質の建築資材であるため、建築に関わる古謡に見える。まず大川の「松金ユンタ」（『八重山古謡』上巻一七一頁）には、

きゃん木柱　　きゃん木の柱を
白み　いじょうば　　白身のいじょうの木を
採りぃ出だし　　切り出し
（中略）
内戸や　　内の戸は
きゃん木戸　　きゃん木の戸を
ばい立て　　立てた

とあり、「きゃん木」を用いた柱と内戸が見える。

登野城の「桴海バナカーバナ筑登之」というユングトゥ（琉球大学八重山芸能研究会「第十一回　八重山芸能発表会パンフレット」一一頁）には、

白みきゃん木　　白身のきゃん木を
七きざんけーらし　　七回斧で削って倒して

とあり、宮良の「桴海ぬ高ばんかーぱんユングトゥ」（『八重山古謡』上巻四九八頁）にも、「白みきゃん木　五きじゃん　きじゃつてぃ」と見える。

また新築儀礼における租納の「家たかぴ」（『八重山古謡』下巻四五一頁）にも、「きゃん木柱（ばら）　取りぃだし
いじょう柱（ばら）　切りぃだし」と見える。

新城の節祭の巻踊り歌謡の一つ「くんなーべちぃ」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』二五三頁）にも、

山入りし　　山に入って
きゃい柱（ばら）ゆ　　きやい（槇）の柱を
採り出す　　採り出す

と見える。

「きゃん木」は意外な比喩にも用いられている。波照間の「野底浜アユ」（『八重山古謡』下巻六二九頁）には、

南（ぱい）ざらに　むいたる　　南ざら（地名）に生えている
大（うふ）きゃん木ぬ　　大きなきゃん木から
うやばしぃぬ　　公用船の
うどぅ取らりるまでぃん　　竜骨が取れるまで
んぞとぅ我とぅや　　あなたと私は
ぬがらるぬ　　のがれることはできない

とある。船材としての用途はあまり聞かない「きゃん木」から公用船の竜骨が取れるまで、二人は一緒だと謡われている。

くうじ

和名はトウヅルモドキ科のトウヅルモドキで、学名は Flagellaria indica L. である。

高さ十メートルに達する常緑の蔓性低木で、陽当たりのよい林縁に多く見られる。茎は緑色で竹の稈に似ており、径は五～十ミリ。枝は葉鞘に包まれている。葉は線状披針形で対生し、先端は巻きひげとなって他の物に巻きつく。材はしなやかでねばりがあり強い。細かく割いてかごやざるなどを作る材料として利用される。

この植物は黒島の「ばいふたフンタカユングトゥ」（『八重山民俗誌』下巻一八八頁）に出てくる。すなわち、ばいふた村のフンタカと称する男は早朝山に行き船材の樫木を切ってきて船を造ったところ、それがまた見事な出来映えであった。その船を海に浮かべた後、彼は、

余ぬ嬉ん　家な上り来　　余りの嬉しさに　家に帰ってきて
割くうじにん　腹上なし　　割ったくうじのように　腹を上にして
挽き臼にん　　挽き臼のように
まら上なり寝びとぅり　　陰茎を上にして寝たまま
聞きばどぅ　　聞いたところ

と、潮鳴りの音を聞き、それが順風の吹く前兆であることを知る。そして順風が吹く頃に村人の見送りを受けながら宮古島へと旅立ち、そこで曲玉を船いっぱい買い求め帰島するという内容になっている。

くにぶん（ふにん・んにん）ぎ

和名はミカン科のヒラミレモン、学名は Citrus depressa Hay. である。

一般にはシークヮーサーの名で知られる野生のみかんである。実は小さく、花は白くて芳香がある。青い実は酸味が強く、酢の代用としてよく利用される。黄色に熟した実は、そのまま食されることが多い。果汁を水に絞り入れ芭蕉布を晒すのにも用いられる。近年、沖縄を代表する味「シークヮーサージュース」としても売り出されている。

八重山歌謡の中にはこの木の実を謡ったものが数多くある。

宮良の「北夫婦ぬふにぶ木ユンタ」（『八重山古謡』上巻五〇二頁）は、大原山に両親が「九年母木」を植え、それが三カ月後には両親の高さほどに成長し、やがて花が咲き実ができると、村の乙女たちがそれを折りに寄ってきたという内容の古謡であるが、その中で次のように謡われている。

うぬ島ぬ　女童達ぬ　　この島の乙女たちが
寄りきそ　　寄ってきて
うぬ村ぬ　かぬしぃ達ぬ　　この村の可愛い少女たちが
寄りきそ　　寄ってきて
九年母玉　折るんで　　九年母の玉を折ろうと
香しゃん玉　折るんで　　香ばしい玉を折ろうと

「九年母木」の実を折るのは、それを糸で貫いて佩玉とするためである。すなわち実が小粒の時に採って乾燥させ糸を貫いて首にかける玉を作るのである。色艶こそないが香りがあって上品の玉とされたという。こうした九年母玉のことはこのほか、新城の「はいきだユンタ」（『八重山古謡』下巻三一九頁）の一節にも「九年母玉　香し玉　さゆかば」とあり、竹富の「むすびぬだんごまジラバ」（『八重山古謡』下巻二〇頁）にも「九年母玉ゆいん

どぅ　香さ玉ゆいんどぅ」と謡われている。特に「むすびぬだんごまジラバ」では、佩玉を「あさぎ家」に持っていき、男に佩かせて体臭を染めた後に女性が佩くといった風習を垣間見ることができる。

竹富の民謡「くいがま節」（『八重山民謡誌』二一九頁）にも、「九年母玉　やりばどぅ　女童真首（まくび）　抱かしょうる」とあり、九年母玉だからこそ女童の首に佩かせるのだと謡われており、それがいかに重宝なものであったかがうかがえよう。

こうした九年母玉のことは八重山歌謡だけでなく、『おもろさうし』（例えば、巻十四の九八四番）や琉歌（例えば、読み人知らずの「今帰仁の城節」）にも見える。ちなみに伊波普猷氏は、これを魔除けとして理解しているが（『伊波普猷全集』第六巻一〇二頁）、一種の装飾品と見てさしつかえないであろう。

黒島の「竹富ぬぎらちぇーまユンタ」（『八重山古謡』下巻一七〇頁）は、各離島の女子の特徴を挙げた特異な古謡であるが、その中に、

波照間島の　イチャマニよ　　波照間のイチャマニは
下八重山ぬ　女童　　下八重山の乙女は
いちゃまにぬ　生りよう　　いちゃまにの生まれは
女童の　うしいでいやよう　　乙女の生まれは
九年母玉　生りばし　　九年母玉のような生まれ
貫きみ佩　産でいばし　　佩玉のような生まれ

とあり、波照間のイチャマニという乙女の生まれは九年母玉のようだと謡われているが、九年母玉の小さくてかわいいところと、その佩玉の上品さを比喩に用いたものであろう。

竹富の「九年母を謡った子守歌」（『竹富島誌』二二八頁）は、子守歌とはいいながらも、内容は九年母の実を折ることを口実にミダゴウマという女性に接近するというものである。

新屋ぬ　んまだんか　　新築の家の内に
あったんちょう　　あったとさ
赤んてぃ九年母ぬ　　赤く（熟した）九年母が
下がりんどう　　ぶらさがっている
でぃーゆか　でぃーゆか　　さあ行こう　さお行こう
ミダゴウマ　　ミダゴウマ
うり折り来いぬ　　これを折りにやってきたから
談合す　　相談しようよ
九年母木ゆ　　九年母木を
折るんてぃらり　　折りに
香ばさん木ゆ　　香ばしい木を
取るんてぃらり　　折りに
うん家ぬ　屋ぬ　　その家の
ミダゴウマ　　ミダゴウマ
一夜抱ぎみむな　　一夜は抱いてみたいものだ

これは登野城の「なさま屋ユンタ」（『八重山古謡』上巻二二一頁）に、「なさま」という家の門の脇に「九年

母木」を植え、初春になって花が咲き果実が実れば、花を折るのを口実に、またその実を折るのを口実に彼女に会いに行こうと謡われているのと、内容が類似している。

与那国の方言では「んにん」というが、与那国の民謡「まーんにんてぃ節」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』六〇一頁）には次のように謡われている。

たぎぬちゃーぬ　真んにんてぃ　　嵩西屋の真んにんは
枝枯りるた　なりゆんとぅな　　枝枯れする程　実っているそうな
にぐが夜や　我んたきゃら　　今日の夜　我々皆で
むい食いぬ　いい相談　　もぎ取って食べようとのいい相談

以下、嵩西屋の「んにん木」に対して、その家の美しい娘を誘い出してくれたらおいしいごちそうを作ってあげようと話しかける内容となっている。

家を新築する過程を美的にオーバーな表現を用いて謡った宮良の「あんがろーまアヨウ」（『八重山古謡』上巻五一〇頁）では、

ふにぶん玉　　ふにぶん玉を
礎ばし　　礎石にし

と、九年母玉を家の礎石に用いたとある。

以上は主として九年母木の実を題材にしたものであるが、木そのものが出てくるのは「あがろうざ節」（『八重山民謡誌』四九頁）である。

あがろうざぬ　ん中に　　東里の真ん中に

登野城ぬ　上なか　　登野城村の内に
九年母木ば　植べとうし　　九年母木を　植えて
香ばしゃ木ば　差しとうし　　香ばしい木を　差して
九年母木ぬ　下なが　　九年母木の下で
香ばしゃ木ぬ　下なが　　香ばしい木の下で
子守だぬ　揃ゆてぃ　　子守姉達が　揃って
抱ぎぃな達ぬ　寄らゆてぃ　　抱き姉達が　寄り集まって

ここでは「九年母木」の下で子守姉たちが寄り集まって子守りをする様子が謡われている。「九年母木」の下はいい香りがするため快適な場所である。大浜の「古見や辻ジラバ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』二二一頁）では、古見の辻の「かてーら」という場所に「九年母木（香ばしい木）」を植えて、その木の下に番所を建て、床板をはめ、白い筵を敷いて、絹枕を用意し、目差（役人）を迎えると謡われており、番所を「九年母木」の下に建て、役人に快適な場所で仕事をしてもらうための配慮が見られる。

新城島の巻踊りで謡われる「おふにやもい」という古謡では「ふみりゃ」と出てくる。上地の古謡によれば、

おふにやもへ　ふみりゃ　　繁茂した　ふみりゃ
ふみりゃ木ば　下し　　ふみりゃ木を下ろし
たきやじ木ば　下し　　たきやじ木（ふみりゃ木の対語）を下ろし
何処萌いた　ふみりゃ　　何処に舞えを出したのか　ふみりゃ
どぅきゃ差しゅた　たきやじ　　如何なる場所に生えたのか　たきやじ

と謡い出し、以下、木が生長し、うるじんになると花が咲き、実もなったので、花や実を折って姉妹や恋人に渡し、彼女等はその香りを体に染めて沖縄旅をしたという内容になっている。

登野城の「浦船ジラバ」（『八重山古謡』上巻八九頁）に、

うるじぃんぬ　陽春の頃の
ふぬびゃ木ぬ　ふぬびゃ木が
ばいたれ　新芽を出した季節に
ばがなつぬ　若夏の
香さ木ぬ　香ばしい木が
ふきぃたれ　若芽を出した頃

と見える「ふぬびゃ木」も同じ木である。

なお「こいなユンタ」には次のような歌詞がある。

大岳ぬ　後(くしぃ)なが　大きい岳の後方に
ざら岳ぬ　側なが　ザラ岳の後に
ばなぎゃ木ぬ　生(むぃ)やうり　ばなぎゃ木生えていて
香さ木ぬ　差しょうり　香ばしい木が差してあって
うるじんぬ　なるだら　陽春の頃になったら
若夏(ばがなっ)ぬ　いくだら　初夏の頃がやってきたら
花や白　咲かりょうり　白い花が咲き始めた

実りや青　くぬみょうり　　果実が青く実っている

「ばなぎゃ木」は宮良当壮氏によれば、「ばなんぎぃ木」すなわち我等の木の意味で（『宮良当壮全集』11、一六一頁）、花は白で実が青いということ、また対語が「香さ木」となっていることから「九年母木」のような柑橘類であろうと推定している。なお大川の「こいなユンタ」（『八重山古謡』上巻一五二頁）では、

大あこうぬ　生やり　　大あこうの木が生えていた
実りあこうぬ　差しょうり　　実りあこうの木が差していた

と、「ばなぎゃ木」「香さ木」に対して「大あこう」「実りあこう」となっているが、宮良当壮氏によれば、これは「鶯ぬ鳥節」の連想からきた誤りである。

くば

和名はヤシ科のビロウ、学名は Livistona chinensis R.Br.var.subglobosa Becc. である。なお古名はアジマサで、日本古代の文献では檳榔と記されている。漢名は蒲葵である。琉球列島、台湾および南中国などの暖地に自生する高木で、低地から山地にかけ群落をなす。肉穂花序は一メートル以上にもなり、春頃に独特の香りのある淡黄色の花を咲かせ、実は楕円形で秋になると紫黒色に熟する。葉は掌状で、径一メートルにも達する。葉柄は一、五～一、八メートルくらいで、基部は長い棘が二列に並んでいる。幹の上部には葉柄基部のさやの部分にある褐色の繊維が密着している。

昔から沖縄では、神の降臨する神聖な木とされ、御嶽や拝所によく見られる。御嶽や神の名にくばを冠したものも多い。また女性の神役はくばの扇を用い、川平村の来訪神マユンガナシはクバの簑笠を着て現れる。一方、日常

的には笠・簑・つるべに用いられているが、かつては船の帆などにも用いられた。

この植物を謡ったものも比較的多いが、まず想起されるのは「鳩間節」（『八重山民謡誌』三二五頁）であろう。

鳩間中岡　走り登り　　鳩間島の中岡に　かけ登り
くばぬ下に　走り登り　　くばの下に　かけ登り
美しゃ生いだる　岡ぬくば　　美しく生えた岡のくば
美らさ列りたる　頂ぬくば　　きれいに並んだ頂上のくば

ここでは、鳩間島の中岡に美しく並んで生えている「くば」の光景が謡われている。

また大浜の「野底浜ユンタ」には、

野底頂に生いたる　　野底の頂に生えた
ぴとぅむとぅくばぬ　　一本のくばが
船ぬ胴　取らりんとぅむ　　船の胴体として切り取られても
夫婦抜き　　夫婦は離別したり
カヌサ抜き　　愛しい人がいなくなったり
ならぬ　　してはならない

とあり、夫婦の不変の契りの比喩の一つとして取り上げられている。

さらに「くば」の葉を題材にした古謡もある。竹富の「くばぬ葉ユンタ」（『八重山古謡』下巻四六頁）には、

風ぬすぶ夜やー　　風のそよぐ夜は
くばぬ葉ぬどぅ　　くばの葉が

ふるふるすんどー　　フルフルと音をたてるよ

と、「くば」の葉が風で音を立てて揺れている様が謡われている。また同じく竹富の「くいがま節」には、タラクジという男が持ち歩いていた九年母玉が姪のカマドのものであったことから、二人は恋仲であると噂され、

赤山ぬ　白山ぬ　くばぬ腕　　赤山の　白山の　くばの葉の腕のように
くがるだき　まどぅりだぎ　　くがるのように　真鳥のように
あらわれ　　現れ

とあり、ここでは、「くば」の葉の腕が揺れているのを、あたかも叔父と姪の不義密通の噂を否定しているかのようだと謡っている。

「くば」の葉ではさまざまな日常品が作られたが、そのうち扇や笠について謡った歌謡もある。黒島の「ぱいふたフンタカユングトゥ」（『八重山古謡』下巻二五二頁）には、「くばぬ葉　扇ば　手招き招き　しーりむぬぬ」と、くばの葉の扇が見え、竹富の「なゆちゃるむん」（『竹富島誌』一六九頁）では、

くば笠や　なゆちゃるむん　　くば笠は何するものか
女童ぬ　被り物　　乙女の被り物だ
あばれ子ぬ　頂かぶし　　美しい乙女が頭にかぶるものだ

と、くば笠のことが謡われている。

また同じく竹富の「馬乗しゃ」（琉球大学八重山芸能研究会「第二十八回　八重山芸能発表会パンフレット」一八頁）にも、

まこんの　すらぐわー　かんだかれ　　椰子蟹の面を破って

くば笠　かーててぃん　しーちゅらさ　　くば笠を被せて美しい
するばく三味線　とぅまいある　　この人に三味線を弾かせたら
くばぬ葉ぬ　振る手に　　くばの葉の揺れる音に
ありに魂　うち抜ぎてぃ　　びっくりした

と、くば笠および「くば」の葉が出てくる。

宮良当壮氏が『八重山古謡』の中で紹介している「山原ユンタ」（『宮良当壮全集』11、一七七頁）には、やや変った用例が見える。

三線てす　　三味線は
くばぬ腕　三線ばし　　くばの葉の柄を棹にした三味線
弦ですや　　弦は
馬ぬ尾ば　弦ばし　　馬の尾の弦

「くば」の葉柄を棹にし、馬の尾を弦にした三味線は、本物の三味線ではもちろんなく、農民が遊び用にこしらえた玩具である。

くばでーさ

和名はシクンシ科のモモタマナ、学名は Terminalia catappa L. である。

海岸近くに生える高木で、幹は直立し、高さ十～二十メートル、径一メートルくらいになる。葉は倒卵形で先は丸く、長さ二十～二十五センチの大きな葉が枝の先の方に集まってつく。花は白色で小さく、葉の付け根から出る

穂状花序の上方には雄花を、下方には雌花または両性花をつける。実は扁楕円形で両側に竜骨状の突起がある。よく枝を張り、大きな葉をつけるので緑陰樹として公園や街路樹として植えられる。冬に落葉し、春には美しい芽吹きが見られる。繁茂した大葉があっという間に落葉するさまを縁起が悪いととらえ、屋敷内に植えることをいやがる地方もある。

この植物は西表島租納の「殿様節」（『八重山民謡誌』三四五頁）に、次のように出てくる。

船浮村　千秋万歳　　船浮村は千秋万歳である
くばでーさぬ　下なが　　くばでーさの木の下で
しぃにぬ痛むけん　　脛が痛くなるまで
膝ぬ痛むけん　　膝が痛くなるまで
立ち待ちん　居たんよば　　待っていたよ
あまぬ　妬たさん　　あまりの妬さに
照る太陽ん　闇なし　　照る太陽も暗闇にしてしまう程だったよ
どぅきぬ　辛酸　　あまりの辛さに
くばでーさ　本ば　　くばでーさの幹を
かい抱ぎ　居たんよば　　掻き抱いていたよ

すなわち、船浮村のカマドーマは殿様（租納村の役人石垣高瑞の渾名）が来るのを「くばでーさ」の木の下で腰が痛くなるまで膝が痛くなるまで待ち続けた。しかし何時になっても殿様の姿は見えないので、嫉妬のあまり太陽の光さえも遮り闇にし、つらさのあまり「くばでーさ」の木を抱いていた、というものである。

また船浮の民謡「石ぬ屏風節」（『八重山民謡誌』三七八頁）では、

船浮くばでーさや　　船浮村のくばでーさは
枝持ちぬ美らさ　　枝持ちが美しい
船浮女童　　船浮村の乙女は
身持ちぬ美らさ　　身持ちが美しい

とあり、「くばでーさ」の木は枝持ちが美しく、船浮の女子は義理がたく身持ちが良いと謡われている。なおこの歌詞は、沖縄本島の「屋慶名くわでーさ節」の「屋慶名くわでーさ」の箇所を「船浮くばでーさ」に替えたものである。

八重山歌謡では、どういうわけか西表島の船浮の「くばでーさ」のみが見えるが、「殿様節」では、カマドーマが殿様を待つ場所として、「石ぬ屏風節」では、枝を張った美しさが謡われている。いずれも「くばでーさ」の特性をうまく歌謡に取り入れたものといえよう。なお、現在西表の船浮集落の海岸近くに生えている、いわゆるカマドマのくばでーさは二代目で、樹齢約一三〇年といわれており、竹富町の天然記念物に指定されている。

くーる

和名はユリ科のオキナワサルトリイバラで、学名は Smilax China L.var. Kuru Sakaguchi ex Yamamoto である。

松林や陽当たりのよい山地に生える蔓性の低木。茎は疎に分岐し、葉柄から出る巻きひげで他の物に巻きつき伸びていく。葉は革質で、落葉性、卵形をした葉の先端は尖っている。花は淡黄色の小さな花が密に咲く。実は球形

で赤く熟す。久米島紬などの重要な染料である。似たものにサツマサンキライ、ハマサルトリイバラ、ササバサンキライ等があり、地方によってはどちらもクールと称している。

この植物は、白保の「ぼすぽー節」（『八重山民謡誌』一七二頁）に次のように謡われている。

びらまぼすぽー　何ぼすぽー　　男の褌は何で作ってあるか
芭蕉なぬ　紅露染み　　芭蕉布を紅露で染めてある

喜舎場永珣氏は、褌の「くーる」染めというのは、交接の際に汚れた褌を比喩的に表現したものであると解している。

こーな・なねーじ・はぬてぃ

和名はクワ科のシマグワ、学名は Morus australis Poir. である。

海岸近くから山裾にかけて見られる亜高木で、幹は直立し、高さ三〜五メートルにもなる。葉は、若い時は深裂することが多いが成木になると卵形となり、先は尖る。熟して暗紫色になった実は甘く、そのまま食したり果実酒にも利用できる。根や幹は天然の染料になる。鳥の糞などから屋敷内や道路沿い等に自然に生えてくることが多い。葉は山羊などの家畜の餌やカイコの飼料として利用される。また幼児の発熱の際に額や体にあてて熱取りとしても利用された。材は太く、強くて弾力性があるので建築材として用いられる。またタンス等の指物にも適し、馬の鞍や三味線の棹などにも利用される。

なお桑は雷除けのまじないに関係する。すなわち雷が鳴ると、日本本土では「桑原々々」と唱えるが、沖縄地方では「桑木の股」または「桑木の下」と唱える。八重山では桑の葉をかざす風習もあるという。こうしたことは桑

の木や葉に呪的なものがあると信じられていたからである。この起源は桑を聖樹とする中国の古い信仰に求められるという（石田英一郎「桑原考」（『日本民族学』一二ノ一・二）。

この植物が登場する古謡に、黒島の「仲本アヤグ」（『八重山古謡』下巻一三〇頁）がある。

仲本ぬ　ん中に　　仲本村の　真ん中に
どぅ村ぬ　びるめに　　どぅ村の　広い庭に
こーな木ぬ　生いりば　　こーな木が　生えた
なねーじ木ぬ　差しょうりば　　なねーじの木が　差された

と始まるこの古謡は、桑の木の枝に大きな神鳥（霊鳥）がやってきて坐り、仲本村が黒島の元村（親村）だと教えたという内容のものである。

与那国の方言では桑木のことを「はぬてぃ木」というが、「かんた世ドゥンタ」（『八重山古謡』下巻六七九頁）には次のように出てくる。

とぅぐですば　　門の側方に
とぅんでむゆたる　　飛び出て生えた
はぬてぃ木　　桑の木

この古謡は、鼓の木を探しに宇良部岳に入ったが良材が見つからず、むなしく帰宅したところ、門の側に桑の良材が生えているのに気づき、それで鼓を作ったら、天まで轟く程の名鼓ができたというものである。

「仲本アヤグ」で神託を述べる神鳥が坐った木が「こーな木」であり、「かんた世ドゥンタ」で「はぬてぃ木」で作った鼓が名鼓であったというのも、桑の木に特殊な呪的な力があるとする観念の現れであろう。

桑の木の根の部分の曲がり具合がいい部分を俗に「馬ぬ鞍曲る」というが、その部分を切って馬の鞍を作るのである。竹富の「ママラマユンタ」（『八重山古謡』下巻六三頁）には、

くわん木鞍　打ちぃかきぃ　　桑木の鞍を　馬にかけて
ママラマや　打ちぃ乗り　　ママラマという女性が　それに乗った

とあり、桑木で作った馬の鞍のことが謡われている。

こうばな

和名はモクセイ科のシマトネリコで、学名は Fraxinus griffithii C.B.Clarke である。山地に生える高木で、小枝はいくぶん白っぽく、淡褐色の皮目がある。葉は洋紙質で、奇数羽状複葉。初夏に白い花を咲かせる。建築材としての用途の他、農具等の柄やステッキ等にも用いられる。

この植物は、西表祖納の「節祭」アンガマにおける「船」の句（星煕『西表島の民俗』一二三頁、友古堂書店、一九八一年）に出てくる。

滑車　　滑車は
こうばな木どぅ　　こうばな木が
滑車でござる　　滑車だ

滑車は帆柱の先端に取り付ける帆を上げ下ろしに用いるものであるが、それに「こうばなぎ」が用いられたのである。なお比嘉盛章「西表島の節祭とアンガマ踊」（『南島』第一輯）では、「ふばな木」と表記され、きわめて堅い木の名と説明されており、『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』でも「ふばな木」と記されているが、方言名の「こ

うばな木」が正しい。

さくら

和名はバラ科のヒカンザクラで、学名は Prunus campanulata Maxim. である。

高さ五〜八メートルにも達する落葉性の高木で、幹は暗褐色で皮目が多い。葉は長楕円形で、縁に鋸歯があり、葉の基部に二個の密腺がある。花は腋生し、芽から二〜三個、葉より下に下垂して開く。花柄は一〜二センチ、がくは紫紅色で、花弁は五枚ある。実は卵円形で先は尖り、赤く熟すると食べられる。

中国南部・台湾が原産地であるが、沖縄での自生地は石垣島の荒川が唯一である。一九七二年五月十五日に国の天然記念物に指定され、現在そこに「荒川のカンヒザクラ自生地」の碑が立てられている。日本一早咲きのサクラであり、また実生で簡単にふやせるため、県内各地で植栽されている。なお付言すれば、沖縄のサクラはもともとヒカンザクラと呼ばれていたが、本土のヒガンザクラと混同しやすいということでカンヒザクラと呼ぶ人も多く、初島住彦・天野鉄夫『琉球植物目録』の一九七七年版ではカンヒザクラ・ヒカンザクラ両方が併記されている。しかし一九九四年増補訂正版ではヒカンザクラのみの記述となっており、近年、元の種名に戻すことで統一が図られたことがうかがえる。

歌謡の中では、その美しい花が特に謡われる。「古見ぬ浦節」（『八重山民謡誌』二九三頁）には、

桜花　ブナレーマ　　桜の花のような　ブナレーマよ
梅香しゃ　女童　　梅の香りのする　乙女よ
いちぃん花やさかり　　何時も花盛りでいてくれよ

とあり、「桃里節」（『八重山民謡誌』一七五頁）にも、

花ぬ色美らさ　　花の色が美しいのは
桜花でむぬ　　桜花だ
女童ぬ美らさ　　乙女が美しいのは
我島でむぬ　　我が桃里だ

とあり、乙女の美しさを桜の花に喩えている。

しぃとぅちぃ・すでぃち

和名はソテツ科のソテツで、学名は Cycas revoluta Thunb. である。

海岸近くの石灰岩域に多く見られる雌雄異株の常緑の高木。幹は太く直立し、高さ二〜五メートルくらいになる。葉は大きな羽状複葉で幹の頂に集まってつく。小葉は線形、先は鋭く尖っている。花粉は雌花に入ってから精子を生ずることで有名。澱粉植物だが、有毒（シカシンを含む）で、先の第二次世界大戦中、飢えをしのぐためソテツの実を食べ、中毒死した「ソテツ地獄」は記憶に新しい。葉は子供の玩具（虫かご）や、葉を重ねてほうきとしても利用される。

古謡では、黒島の「竹富ぬぎらいちぇーまユンタ」（『八重山古謡』下巻一七二頁）に見えるが、その用例はソテツ本来の特性とはあまり関係がない。すなわち、

西表のマナシャマ　　西表のマナシャマは
ゆくむてぃぬ女童　　ゆく表の乙女は

マナシャマぬ　生りや　　マナシャマの生まれは
女童ぬうしでぃや　　乙女の生まれは
焼き蘇鉄ぬ　生りばし　　焼き蘇鉄のような生まれ
黒びちぃきゃぬ　産でぃばし　　黒焦げした生まれ

と、西表のマナシャマという乙女の生まれは野火で焼かれた蘇鉄のように色黒であると謡われている。

また竹富の「イダフンユングトゥ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一四四頁）には、イダフンビギローマという男が、畠に出て雨が降ってきたので「ゆしきぬかたんが　すでぃちぬかたんが　居りてぬ思いうどぅ」と、蘇鉄の側で雨宿りして思いにふけている様子が謡われているが、いささか状況が想定しにくい。

しんだん

センダン科のセンダンで、学名は Melia azedarach L. である。

海岸近くから林野にかけて広く自生する落葉性の高木。樹皮は黒褐色で縦に深く裂ける。幹は直立し、高さ五〜十五メートルくらいになる。葉は二〜三回羽状複葉で、小葉は楕円形で先はとがる。春（三、四月）頃、枝の先に十〜十五センチの円錐花序を出し、芳香のあるうす紫色の花を咲かせる。花の後に二〜三センチくらいの楕円形の果実を多数つける。秋から冬にかけては完全に落葉した枝に黄色に熟した実が美しい。夏場はセミがよく集まる木なので、校庭に教材用として植栽される。材は柔らかいが虫がつきにくいので、建築材の他、簞笥や指物に適している。また、薬効もあり、回虫やギョウ虫には、樹皮を乾燥させたものを煎じて服用するとよいと言われている。

この植物は夜の子守歌の一節に見える。喜舎場永珣「八重山島童謡」（『八重山民俗誌』下巻所収）には次のよ

うにある。

与那国屋ぬ　後ぬ　しんだん木　　与那国屋の後方の栴檀木は
親鷲　用ぬ　しんだん木　　頭職が乗る公用船のための栴檀木です
うぬ家ぬ　乙女子　　その家の娘が
どぅむつぁば　　結婚する時に
引出しい　苧績箱　　簞笥や苧を入れる箱に
ししぃひょうり　　細工して下さい

しかし宮良当壮「八重山の童謡と民謡」（『宮良当壮全集』11、五一九頁）には次のように紹介されている。

与那国屋ぬ　しんだん木　　与那国屋という家の栴檀木は
親勝し冥加ぬ　しんだん木　　親木よりも幸福な栴檀木です
うぬ家ぬ娘ぬ　子産さば　　その家の娘がお嫁に行って子供を産んだならば
麻桶ん枕ん　　糸をつむぎ入れる麻桶や枕もその栴檀の木で
ししひょうり　　作ってやって下さい。

このように若干の異同はあるが、与那国屋の屋敷内に生えている「しんだん」の巨木を称え、娘のためにその木材でタンスやスクイや枕などを作って下さいと謡われている。

ずぐ・じぐ・ぶーじぃ・赤ようら

和名はマメ科のデイゴ、学名は Erythrina variegata L.var.orientalis Merr. である。

インド原産の落葉高木で、幹や枝には棘がある。葉は三出葉で、小葉は広卵形をしており、冬になると落葉する。春から初夏にかけて真っ赤な花を咲かせる。花は房状花序で枝の先に大きな房をつける。花の後に二十センチほどのマメの鞘をつける。世界には百四十種のデイゴの仲間があるといわれ、挿し木で増やせる。沖縄を代表する花木として県花に指定され、公園や校庭などによく植えられている。材質は軽くて柔らかいため、獅子頭やアンガマの面を彫るのに用いられる。

「松金ユンタ」（『八重山古謡』下巻四三〇頁）には、松金が幼い頃住んでいた掘立小屋の角柱はあだんの柱で、「中柱や　ずぐ柱　とぅる建て」すなわち中柱は「ずぐ」の柱であったと謡われている。中柱は大黒柱ともいわれ、家の中心に立てられ、棟木の中央を支える柱である。それには普通堅くて頑丈な木を用いるのが、入手するだけの経済力がなく、軽くて柔らかいデイゴでまにあわせざるを得ない程の貧家であったというわけである。

また前述した波照間の「野底浜アユ」（『八重山古謡』下巻六二九頁）には次のようにある。

野底浜　むいたる　　野底村の浜に生えている
じぃぐば　　じぐの木から
かちゃばみーぱ　　四寸角の材木が三本
取らりるまでぃん　　取れるようになるまで
んぞと我とぅや　　あなたと私は
ぬがらるぬ　　のがれることはできない

ここに見える「かちゃばみーぱ　取らりるまでぃん」とは、喜舎場永珣氏に従えば「一本のデイゴの木から四寸角の材が三本削り取れる位」という意味であるが、デイゴの木がそこまで生長するのは相当に長い年月を要すると

いうことを、二人は離別することなくいつまでも一緒だという、不変の契りの比喩としている。

この木を謡ったものはこの二例であるが、いずれもデイゴの特性を取り上げたものとはいえない。それが最も生かされているのはむしろ花である。

歌謡には「じぐの花」または「赤ようらの花」と出てくるが、真っ赤な花であることから、赤色の象徴として謡われることが多い。

例えば黒島の「さしぬがんアユ」（『八重山古謡』下巻一四三頁）には、「紅苧晴衣（あかがぎん）　じぐぬ花　たらし」とある。紅苧晴衣とは喜舎場永珣氏によれば、タラマ花と称する赤色の染料で苧麻糸を染めて織った衣装で、結婚式で花嫁が着るものという。また「松金ユンタ」（『八重山古謡』下巻四三五頁）でも、「赤絹や　ずぐぬ花　たらし」と見える。

さらに小浜の「うろんつぃんぬジラマ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』二四六頁）にも、「ずくぬ花　あかる美しゃ　咲きばし」と、赤色の美しい花として謡われている。

ところで、でいごは「赤ようら」または「赤ゆら」とも称される。例えば「桃里節」（『八重山民謡誌』一七五頁）には次のように謡われている。

赤ゆらぬ花や　　赤ゆらの花は
二三月どぅ咲ちゅる　　二・三月に咲くが
我けーらぬ花や　　我々皆の花は
何時ん咲ちゅさ　　時期を問わず咲いている

「赤ようら」の語源については明確ではないが、喜舎場永珣氏の「瓔酪」説が今のところ有力視されている。

デイゴは石垣・白保方言では「ぶーじぃ」、波照間方言では「ぶじぃ」である。波照間の子守歌「東方の後のぶじぃの上の」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』七〇頁）にはこれが見える。

あったぬ後ぬぶじぃぬ上ぬ　　東村の後方のデイゴの上に
ごーかんたーまん　　コカル鳥たちが
ぴーやんたーまん　　ピーヤ鳥たちが
うがりゃんてぃば　　集まってきては
ビーヤゴッコ　ビーヤゴッコ　　ビーヤゴッコと鳴いている

なお出典では「ぶーじぃ」とのばしているが、ここでは現地の方言に従い「ぶじぃ」として掲げる。

するんてぃ・するんで

和名はクワ科のホソバムクイヌビワで、学名は Ficus ampelas Burm.f. である。

低地から山地の林に見られる常緑の中高木で、樹皮は暗褐色。葉は上面がざらついている。無花果は球形でざらつき、径五～九ミリで葉の付け根につく。腐食した幹にはキクラゲがつきやすい。

この植物は、与那国の「ながなんドゥンタ」（『八重山古謡』下巻六八八頁）に「するんで木」として見える。

山木だし　　山の木を伐って
はでぃんに　　んに（舟）を剝ぎ造った
するんで木し　　するんで木をもって
うきんに　　浮け舟を造船した

すなわち、ながなん家の乙女と真保久利とは幼少の頃から許嫁であったが、男性が月夜の浜遊びの際、他の女性に心を奪われたため、許嫁の女性は怒って実家に戻ってきたという内容の歌詞に続けて、上記の歌詞があり、最後に、大海を走る船は島に戻ってくるが、野原に立つ船は島には再び帰ってくることはないと、復縁の困難なことが比喩的に謡われている。

すんむとぅ・すんなー・ふちん

和名はチャセンシダ科のシマオオタニワタリで、学名は Asplenium nidus L. である。

森林の湿り気のある岩上、または樹幹上に着生する常緑の大型シダで多年生。根茎は塊状で、多数の葉を放射状に出す。葉柄は短く、黒褐色の鱗片を密布する。葉身は線状長楕円形で革質。表面はなめらかで光沢があり、先は尖っている。庭園などで栽培される他、生け花の花材としても利用される。また八重山地方では、この新芽（ぜんまい状になっている）は法事の際の精進料理の一品として欠かせないものとなっている。

この植物は竹富の「ぴんに木ユンタ」（『八重山古謡』下巻七八頁）に、

すんむとぅ木ぬ　生いやよ　　すんむとぅ木の生え方は
木ぬはんた頼りどぅ　　木の端を頼って
生いやんせ　　生えているよ

と、その生え方が謡われている。

竹富の「あーぱー石ユングトゥ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一四四頁）には「すんなー」と出てくる。すなわちその古謡の後半部分は次のようになっている。

真金道から　走り登り　　真金道から　走り登り
穴ぬ穴曲がりゃー　　穴の穴曲がり
すんなーぬ　寸曲がりゃー　　すんなーの寸曲がり
畠廻りし　見りばどぅ　　畠廻りをしてみたら
人の畠や　そいばかり　　人の畠は整地されているが
我畠や　荒れはてぃてぃ　　私の畠は荒れはてて
がーら口ぬ　大石加那志ぬ前ゆ　　がーら口の大石様の前で
ひされー　　ございます

ここに見える「すんなーの寸曲がり」とはオオタニワタリのぜんまい状の新芽を表現したものであろう。

また、小浜の「山樫ぬアヨウ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一六八頁）に、

ふちんぬ茎ぬ　根下りや　　ふちんの茎の根下りは
石ぬ上にとぅ　根下りす　　石の上に根が下りる

と見える「ふちん」もこの植物に同定できる。

そうぎ

和名はクサベラ科のクサトベラで、学名は Scaevola taccada Roxb. である。

海岸に生える代表的な常緑高木。全体に白い短い軟毛があるか、または無毛。小枝は太く径一センチくらいで、枝の芯の部分は白くスポンジのように柔らかい。葉は小枝の先端に集まってつき、十～十五センチくらいのへら形

で肉質。花は白く、集散花序に五～九個咲く。

「慶田盛ぬクンチャーマユンタ」（『八重山ユンタ集』四五頁）は、慶田盛家のクンチャーマという乙女が、早朝に起きて井戸水で体を洗い、美しい衣装を着て浜に遊びに行く途中、役人に呼び止められ関係を持つことを相談するという内容の古謡であるが、その中に、

浜木枝　そうぎ木枝　　浜木枝　そうぎ木枝を
折り持ちよ　　折って
筵かた　敷寝かた　　筵や敷き物になるように
作りょうり　　作って

と、この木の枝葉を敷き物としたことが見える。

また、小浜の「マカルセージラマ」（『八重山古謡』下巻三八二頁）は、マカルセーという女性が畑へ行きラッキョウを掘りに行き、籠いっぱいになったラッキョウを海岸で洗っているところを、アブゼマに声をかけられ、山中に誘われる。そこで夜まで時を過ごし、帰宅して親にどのような言い訳をしようか、浜千鳥が片羽を引きずっていたので介抱していたと言葉巧みに話そうか、親を騙すのは容易いことだ。という内容の古謡であるが、そこでも情事の場面は、

そうぎぬ枝　折り落とぅし　　そうぎ木の枝を落として
筵ぬ形わ　作りって　　筵の形を作って

と謡われている。

なお新城の「びやんな島ユンタ」（『八重山古謡』下巻三二四頁）でも、「木ぬ葉ば　敷きにばし」と、特定の

植物名は挙げないが、山中で木の葉を寝床にして野合した様子が謡われている。但し下地では「ユスキむるぃ踏んなーし　茅むるぃし踏んなーし」と謡われており（野底宗吉『節祭ジラバ集』九九頁）、木の葉ではなくススキまたは茅に置き換えられている。

だしきゃ

和名はアカネ科のシマミサオノキ、学名は Randia canthioides Champ. である。

山地に生える常緑の小高木。幹は直立し、まばらに枝を分岐し、高さ三～五メートルくらいになる。葉は長さ一センチ内外の葉柄があり、対生している。葉身は長楕円形で、先は尖り縁は全縁である。初夏のころ、長い花柄がある白い花を葉腋に数個つける。材は丈夫なのでステッキの材料となる。

なお沖縄では、十字になったものには特別な呪力があると信じられており、それを「アザカ」と称した。この木も葉が対生していることからアザカの一種と見なされていたようで、与那国島では病魔退散の祈禱の際、この木で作った杖すなわちダシカグサンでうちのめすぞ、それでも聞かない時は、ダシカクディ（ダシカ釘）を大地に打ち込み、身動きができないようにするぞ、という呪文を唱えるという。（池間栄三『与那国の歴史』〈自家版〉五二頁）

古謡では前掲の「ウンダマリジラバ」（『八重山古謡』下巻五九頁）にのみ、次のように見える。

だしきゃ木や　　だしきゃ木は
叔母（ばば）しょうり　　叔母が
まきゃ来でぃ　　採ってきて下さい

すなわち、ウンダマリの花嫁を迎えるために、叔母の割り当てとして「だしきゃ木」を採ってくることが謡われ

ているが、上記に述べたような木の呪性との関連は見出せない。

どぅす

和名はモクレン科のオガタマノキ、学名は Michelia compressa Sarg. である。

山地に生える常緑の高木で、幹は直立し、高さ五〜十五メートルくらいになる。冬芽は光沢のある褐色の毛でおおわれて艶があり、裏面はいくぶん青白色を帯びる。冬、新しい葉の腋に淡黄白色の芳香のある花を咲かせる。建築材に用いられる。

この植物は、平得の「池の坊主ユンタ」に「とぅむぬ木」の対語として見える。

とぅむ・たぶ

クスノキ科のタブノキのことで、学名は Persea thunbergii Kosterm. である。

石灰岩地帯から山地まで広い範囲にわたって自生する高木。幹は直立し、高さ十〜二十メートル、直径一メートルくらいになる。葉は倒卵状長楕円形で革質。表面は深緑色、裏面は灰褐色で、枝の咲きに集まってつく。一〜三月頃小さな黄緑色の花を咲かせ、四〜五月ごろ実が黒く熟する。ちなみに西表租納には、樹齢推定二六〇年とされる「タブの老木」があり、竹富町の天然記念物に指定されている。

樹皮は沖縄線香の原料となる。すなわち樹皮を乾燥させて炭に混ぜ、ついてこねた物を型に入れると沖縄線香が出来上がる。葉には糊分があり水につけておくとネトネトするため、屋根瓦をつなぐ漆喰を作るときタブノキの葉をつけた水を使用するとよいとされていた。

この植物は、宮良の「池のぶしぃジラバ」（『八重山古謡』上巻四九四頁）に、「片乳から　樫木　片眼から　とぅむぬ木」として見えるが、樫木は船体の板材に、「とぅむぬ木」すなわちタブノキは竜骨になったと謡われている。樫木の場合は良質の船材であるが、タブノキが果たしてそれに匹敵するような材質であったか疑問である。

「たぶ」は古謡の中では、山桃の対句として用いられることが多いが（「むん」の項参照）、西表島租納の「米稔らばユングトゥ」（『八重山古謡』下巻四七六頁）では、「たぶ」の語が単独で出てくる。

たぶ稔らば　たぶ稔らばぬよ　　たぶ（山桃）の稔っている状態は
たぶ稔りすや　枝どぅぴきまいる　　枝がたわむ程である

と、たぶの実がたわわになっている様が謡われている。

波照間のわらべ歌「いなま道ちゅらさ」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』五四頁　※この本では、演唱者は西大舛ナヘ（八十一歳）で、録音地は新城となっているが、ナヘさんは波照間出身であり、歌詞の出てくる村名も波照間の村であることから、もともとは波照間で謡われていた「わらべ歌」とみられる）に、

畦道美らさ　　畦道の美しさは
ゆーたぶ木の美らさ　　ゆーたぶ木が美しい
富嘉ぬ村女童　　富嘉村の乙女は
目眉ぬ美らさ　　目もとが美しい

と、ゆーたぶ木も同種と見てよいであろう。

ところで、小浜の「ダートゥーダー」の「アソッキ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』六一四頁）には、「たぶぬ花木に　雪の花咲ちゅんど」と、たぶの花木に雪の花が咲くと謡われている。たぶの花の色が白であれば、花が

真っ白に咲き誇っている様子を表現したものとして理解できるが、実際には黄緑色であるからそうした解釈は成り立たない。あるいはたぶの新芽のことであろうか。ちなみに喜舎場永珣氏が採録した「アソッキ」（『八重山民俗誌』上巻三二八頁）には、「ターブゥヌー　花垣ニー　ユイヌ花咲チュンドー」とある。

ばんしる

和名はフトモモ科のバンジロウで、学名は Psidium guajava L. である。

南アメリカ原産の常緑の果樹で、三メートル内外の高さになる。若い枝は四角形で、葉は長楕円形。花は美しい白色で、芳香があり、おしべが目立つ。果実は球形で、径四～五センチで、中に多数の固い種子がある。果肉は黄色、淡紅色等いろいろな品種がある。ビタミンCが豊富で、はじめの頃は少々酸味があるが、熟すると甘くて美味しい。近年、生食、ジュース、ゼリー等の材料に利用されている。葉は薬効があり、乾燥させて「グワバ茶」として市販されている。

この植物は、西表（星立・租納・白浜・船浮）の子守歌（那根亨『西表の方言と民俗』〈自家版、一九七七年〉九六頁）に、

シセマぬ母　帰りおーるんど　　嬢ちゃんのお母さんは　やがて帰ってくるよ
畑からぬ土産　何からら　　畑からのみやげは何だろうね
ばんしるば　持ちおるど　　ばんしるを持ってくるよ
泣ふなよシセマ　泣ふなよ　　泣くなよ嬢ちゃん　泣くなよ

とあり、女の子どもへのみやげに「ばんしる」を取って帰ることが謡われている。

ぴんにき

和名はヒルギ科のオヒルギまたはアカバナヒルギで、学名は Bruguiera gymnorrhiza Lamk. である。河口汽水域のマングローブ林に生える常緑の高木。幹は直立し、高さ八～二十五メートルになるといわれている。葉は長楕円形、厚い革質で、先は尖り対生する。花は赤色で、葉に単生する。

新城の「大川原ぬぴんに木」（『八重山古謡』下巻二九六頁）には、

大川原ぬぴんに木　　大川原のひるぎ
ぴんに木ぬ生いや　　ひるぎ生え方は
湊端生いさ　　湊の端に生える
やらざ端生いさ　　やらざの端に生える

とあり、竹富の「ぴんに木ユンタ」（『八重山古謡』下巻七九頁）は、

ぴんに木ぬ　生いやよ　　ひるぎの生え方は
川ぬ端たゆりどぅ　生いやんせ　　川の端に生える

とあり、「ぴんに木」が川端の泥土を利用して生えることを謡っている。

また租納の「井戸ぬ端ぬあぶだーまユングトゥ」（『八重山古謡』下巻四八〇頁）には、

ぷし木ぬ下らぬ　　ぷし木の下に棲息している
きぞがま　　きぞがま（シジミの一種）が
ぴーに下り　ぎらなるけ　　珊瑚礁に下りて　しゃこ貝になるまで

我がけーらぬ生命　　私たちの命も
島とぅとぅみ　あらしょうり　　島とともにあらしてください

という歌詞があるが、ここに見える「ぷし木」もヒルギのことである。

まつ

和名はマツ科のリュウキュウマツで、学名は Pinus luchuensis Mayr である。

トカラ列島の悪石島から西表にかけて分布する二葉性の松で、陽あたりのよい山地に自生または造林されている。樹皮は黒灰色で縦に深く裂ける。葉は線形で十～二十センチの細長い葉が二枚ずつつく。果実は卵形の球果で、松かさの一枚一枚にプロペラのような種が一個ずつできる。材は、シロアリがつきやすく、建築材には適さないので造船、造園等に用いられる。また幹は松脂用に、葉は薬用として利用される。琉球列島のものは固有種であり、沖縄県の「県木」に指定されている。

喜舎場永珣氏によれば、昭和の中頃に伐採されるまで、崎枝村の東南方は松の木が林立していたというが、崎枝の「とぅまた松節」（『八重山民謡誌』二〇三頁）には、その松のことが謡われている。

とぅまた松ぬ　下から　　とぅまた松の下から
馬ば乗り　おうるすや　　馬に乗ってお出になるのは

以下の歌詞は、どなたが乗っておられるのか、崎枝村の役人が乗っておられる、崎枝の晴い女がお供しているとなっており、役人が馬に乗って松の下を通う光景が浮かぶ。

「登野城あさぱな」（『琉球列島 島うた紀行 〈第二集〉』四六頁）によれば、

山鳥や松が上にどぅ　　山鳥は松の木の上が
宿やとぅたんど　　寝場所だったんだよ
昔我ん思やや我身が上にどぅ　　昔の私の恋人は私の体の上が
宿やとぅたんど　　寝場所だったよ

と、山鳥が寝る木として松が謡われている。

西表島租納の「岡ぬ親方ユングトゥ」（『八重山古謡』下巻四八七頁）は、物好きな親方が鷹の眼に田を掘って稲を植えたら、一本から一万本、二本から二万本、三本から数知らないくらい分けつしたという、奇想天外なことを謡ったものだが、鷹は庭の池の周囲に植えられた松に坐っている想定である。すなわち、

岡ぬ親方　　岡の親方は
物好き　　物好きで
庭ぬ真中に　　庭の真ん中に
池掘りてぃ　　池を掘って
池ぬ側端に　　池の周辺に
松植びてぃ　　松を植えて
松ぬ枝に　　松の枝に
鷹坐してぃ　　鷹を坐らせて

と謡われる。

登野城の「いきぬぶずユンタ」では「片耳から　松ぬ木　片耳から樫木」と見えるが、各地にある同様な古謡の

うち、登野城のものだけが片目から松の木が生えてきたと謡われている。松木が船材としても用いられたことによるものであろう。

与那国の「家たかび」（『八重山古謡』下巻七二九頁）には、「松ぬ葉ば　茅ばし」と、松の葉を茅の代用としたことが謡われている。この古謡は、新築の家がいかに豪華であるかを示すために、例えば、菊目玉を礎石にし、銀の木を桁にし、黄金の木を棟にしているといったように、現実にはありえないことをオーバーに表現しているが、松の葉を茅の代用にしたというのも、そうした表現形態にすぎない。

民謡「とーがにすざー」（大浜安伴『声楽譜附　八重山古典民謡工工四』下巻九六頁）では、

一本松ぬ実りば落て　二本なり　　一本の松から実が落ちて二本になり
唐船ぬ柱なるとぅん　　唐船の竜骨になろうとも
うらが上にゆく肝持つぁで　　あなたの上に他の肝を持つ程の
我ぬやあらぬ　　私ではない

と、松の実が落ちてそこからまた木が生え、それが竜骨になるまで、私の気持ちは変わることはないという比喩に用いられている。これまで度々出てきた「野底浜アヨウ」の形式内容を受け継いだものといえよう。

さらに「宮良川節」（安室流協和会『八重山古典音楽工工四　全巻』七九頁）および竹富の「じっちゅ節」（『竹富島誌』一九一頁）には次のような歌詞がある。

常磐なる　松ぬ　　常磐なる松は
変わる事　無さみ　　変わることはない
いちん　春来りば　　いつも春が来ると

色どぅ　勝る　　色がすばらしい

これは琉歌からの転用であるが、「常磐なる松」というのは『万葉集』や『古今和歌集』などにも見える古い表現形態である。

「目出度節」（安室流協和会『八重山古典音楽工工四　全巻』三五頁）には本来の歌詞とは別に、比較的新しくつけられたと思われる「松竹梅」の歌詞がある。その一つが、

松は千年の齢を保ち　　松は千年の年齢を保って
老いて若やく事ぬ嬉しゃ　　老いてもなお若く嬉しいことよ

と、松を謡ったものである。

西表島租納の「節祭」における「出船の歌」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』六一〇頁）に、

柱　　柱は
しんき松どぅ　　しんき松が
柱でござる　　柱だ

とあるのも、「ござる」という言葉が用いていることからして、本土からの影響が考えられる。

まーに

和名はヤシ科のクロツグで、学名は Arenga tremula Becc.var.engleri Hatusima である。

石灰岩地域の低地から、山裾にかけて見られる常緑の低木。幹は、直立し、葉鞘が腐ってできた黒色の粗い繊維のシュロ毛で密に被われている。葉は大型の羽状複葉で長さ三メートルにもなり、多数の小葉をつける。小葉は線

形で長さ三十～五十センチくらいになり、裏面は灰白色を帯びる。三～五月にかけて橙色の花が咲く。実は丸く、径二センチ程度で黄色から橙赤色に熟する。葉鞘の基部にできる黒い繊維を八重山地方では「ふがら」と称し、日常生活のさまざまのものに利用した。この繊維で縄をない、網状になった部分を袋として利用した。また民俗芸能等で、頭にかぶるぼうしやカツラを作ったり、獅子頭の毛に利用したりする。葉は大きくて丈夫なので、四、五本を砂や土に差し、夏の暑い日差しよけの即席の小屋を作ったり、目隠しのための垣根等に利用される。

古謡では、「まーに」の芯の柔らかさが柔和な人間の出生の比喩に用いられている。例えば大浜の「芭蕉やびちぃジラバ」（『八重山古謡』上巻四七四頁）には、

まーにやびちぃ　　まーにの芯は
やふぁさ産でぃばし　　柔らかい生まれ

とあるが、これは芭蕉の芯同様、子は生まれながらにして親に似ることの比喩として謡われている。また石垣の「インダレユンタ」（『八重山古謡』上巻二六七頁）では、インダレという男の出生の様子を「まーにぬ茎ぬ　やふぁらさ生れ（まーにの茎のような　軟らかい生まれ）」と謡われている。

「ふがら」を謡ったものもある。石垣の「しゃがむやー」（『八重山古謡』上巻三三一頁）には、

ふがら山ぬ　ありばー　　ふがらの山が　あった
ふがら山ぬ　中なんが　　ふがらの山の　中に

とあり、これを陰毛の比喩に用いている。

また新城の「二月ジラバ」（『八重山古謡』下巻二八六頁）では、

ふがら網　んにばり　　ふがら網を張った

守る綱　まえばり　　守る綱を張った

とあり、「ふがら」で綯った縄が謡われている。新城下地の「古見山ジラバ」（『節祭ジラバ集』八三頁）にも、「ふがらピョンばピョン縄ばし（クロッグの毛皮縄をピョン綱にして）」とある。ピョン縄とは櫓を漕ぐ時握手の部分に掛ける縄のことであるという。

しかし「ふがら」縄はこれ以外の用語でも謡われている。鳩間の「あーばーれーの唄」（『八重山古謡』下巻四一七頁）に「くんぴびるば　かきなーし」と見える「くんぴびる」はクロッグ縄のことで、それを掛け縄にしてという意味である。また与那国の「だーとだき」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一一三頁）に、「くるじなば　ちなばし」と見える「くるじな（黒縄）」もクロッグ縄のことと見られる。さらに与那国の「家たかび」（『八重山古謡』下巻七二九頁）に、「山いとぅばし　かなんば」とある山糸もクロッグの糸であろう。

みみじゃー

和名はアカネ科のシロミミズで、学名は Tricalysia dubia Ohwi である。

山地に生える亜高木で、幹は直立し、高さ二～五メートルくらいになり、小枝は淡褐色を帯びる。葉は長楕円形で革質。先は尖り、対生し表面には光沢がある。花は黄白色をした小さな花で、葉腋に数個集まって咲く。材は器具等に用いられる。

「山の木節」（『宮良当壮全集』11、五二一頁）には、

山の木の重さあ　　山の木で一番重いのは
みみじゃー木でむぬ　　みみじゃーという木だ

とあるが、この木が何故、山の木の中で一番重い木なのか今のところ未詳である。

むたび

和名はクワ科のイヌビワで、学名は Ficus erecta Thunb.ex Kaempf. である。

海岸近くの低地から山裾にかけて見られる低木。葉は楕円状披針形で、先は尖る。葉腋にイチジクのような小さな無花果をつける。新城島の人々がこの植物を「花咲かずに実のつく木」と称するのはこのためである。実を取ると白い乳白色の液が出る。実の形が乳頭に似ていることや乳液を出すことから、沖縄本島ではアンマーチーチ（お母さんのオッパイ）という方言名を持つ。八重山地方の方言名は「むたび」の他「すたび」「すたぶ」「したび」「つたび」があるが、その名の由来は不明である。

この植物は新城の豊年祭の歌（『南島歌謡大成 Ⅳ八重山篇』四五四頁）の中に出てくる。

むたび木ぬ実や　　むたび木の果実
実り美らさあしが　　実っている様は美しいが
花や咲かぬ　　花は咲かない

なお『南島歌謡大成』がこれを「真樟木（またぶ）」と訳しているは誤りである。

むみん

和名はアオイ科のワタで、学名は Gossypium arboreum L.var.indicum Roberty である。

インド原産の低木性植物で、普通一年生草本として栽培されている。花は淡黄色で、オオハマボウの花に似てい

る。花の咲いた後に緑色の実ができ、やがて実が茶色に熟してはじけると中から綿とそれにくるまった黒い種子が出てくる。その綿を紡いで糸にし、布を織ることができる。

この「むみんばな（木綿花）」のことが謡われた有名な歌が「月夜浜節」（『八重山民謡誌』一五七頁）である。

月夜浜　だきぃぬ　　月夜浜のような
岸ぬ浦ぬ　木綿　　岸の浦の木綿
木綿花　作てぃ　　木綿花を作って
木綿かし　かきら　　木綿の紐をかけよう
繰り返し　返し　　繰り返し返し
指はちぃき　見上ぎりば　　弓弦で解して見上げると
筋むちぃぬ　美らさ　　糸筋も美しく
ゆみ美らさ　あむぬ　　ゆみ糸もよく揃って
吹かば　飛ぶ　　吹くと飛ぶような
手巾しょて　待ちゅら　　手巾を織って待ちましょう

この歌の内容は、岸の浦は真っ白い綿花が開花しあたかも月夜の浜辺のようであり、その綿花から糸をとって手巾を織り、愛しい人を待つというものである。

これに類似の歌詞は沖縄本島にもあり、その影響を受けたものと見られる。なお『八重山島年来記』によれば、八重山において綿布が織られるようになったのは一六四二年（崇禎十五）以降で、大城与人が慶良間に流刑中、そこで綿布の製法を学び、赦免され帰島したその年に島中の女性に稽古させたのが始まりであるという。

この他、『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一四七頁に収載されている黒島の「ぱいふたフンタカユングトゥ」には、

花木綿手拭し　　花木綿の手巾で
手招きばし居りば　　手招きをしていると

という句が見える。但し『八重山古謡』（下巻二四八頁）では、

ちぃかん染み手拭ばかみ　　絞り染めの手巾を被って
手招きしる者　　手招きをしている者は

となっており、木綿の手拭とはなっていない。

むりく

和名はモクセイ科のマツリカで、学名は Jasminum sambac Ait. である。

中国・セイロン原産の低木で、高さ二～三メートルになり、さし木でふやすことができる。春から秋にかけて香りのよい白い花を咲かせる。ちなみにインドネシアとフィリッピンでは国花に指定されており、中国・台湾や八重山地方では、この花を摘んで乾燥させ、お茶に入れて香りをつけるのに利用している。

古謡の中では、その花が特に謡われている。登野城の「なさま屋ユンタ」（『八重山古謡』上巻二二三頁）には、

びらま家ぬ　東たんが　　びらまの家の東方に
むりく花ぬ　咲かりんちょ　　むりく花が咲いている
花折りゆ　なつきし　　花を折るのを口実に
びらま家ゆ　見舞いしく　　びらまの家を見に行こう

とあり、むりくの花を折るふりをして恋男に会うことが謡われている。

夜の子守歌（『岩崎卓爾全集』七一頁）にも、

びらまぬ家の東方（あんたん）が　　びらまの家の東方に
むりく花咲かりょうり　　むりく花が咲いている
花折りなつけでいけ　　花折りを口実にして
びらまむ見やあく　　びらまを見に行こう

と、同様な歌詞がある。

八重山の各地にある「首里子ユンタ」の大要は次のようなものである。首里の御曹子は気品が高い故に一人の妻に満足せず、よその島へ渡り、女性の元で日夜歓楽におぼれていた。しかしそれ程日も経たないうちに、首里王府から登城するよう通達がきたが、女性のところで礼服を用意することができず、本宅にもどり本妻に事情を説明する。最初は冷ややかな態度をとった本妻も非を許して蝶型の羽衣のような礼服を取り出し草履を持たせて送り出す。ところが途中大雨が降り、礼服を濡らしてしまい、登城を断念して戻り、本妻を苦しめた罰があたったのだと反省・懺悔する。「むりく花」は平得の「首里子」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』三四三頁）のみに見えるが、礼服のことで本妻のもとに戻ることになった首里子は、ばつが悪く正面から入ることができず、

ぐしく端　飛び越やー　　石垣の端を飛び越えて
むりく花ん　飛び越やー　　（生け垣の）むりく花を飛び越えて

と謡われている。

また黒島の「南が星ユングトゥ」（『八重山古謡』下巻一三四頁）には、

南が星　　南が星（ケンタウル座のアルファとベーター星）は
むりく花　　むりく花が
白さはい　　真っ白く美しく
はくしぶる　　咲いているようだ

とあり、南が星の美しさをむりく花に喩えている。

むろんぎ

和名はアカネ科のサンダンカで、学名は Ixora chinensis Lamk である。

モロッコおよび中国南部原産の常緑低木で一～一・五メートルくらいの高さになる。デイゴ、オオゴチョウとともに沖縄の三大名花に数えられる。花は橙色で、茎頂にゴムマリのように丸く集まって咲くが、果実は見あたらない。

この植物は、小浜の豊年祭におけるアカマタ・クロマタが家々を訪れる時の歌（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』四一四頁）に、

むろんぎや　花咲かち　　むろんぎは　花を咲かせ
美らさあしが　　美しくあるが
咲ち美らさあしが　　咲き清らさあるが
実りやねーぬ　　果実はできない

と謡われている。

なお、『南島歌謡大成』の対訳の元になった宮本演彦「南島・村々の祭り　附アカマタ・クロマタ・マユンガナシの祠章」（『南島研究』一二）では「梔子」と訳している。しかしクチナシは実がなる植物であり、この歌詞にあわないので、その同定は誤りであろう。

むん

和名はヤマモモ科のヤマモモ、学名は Myrica rubra S.& Z. である。

山地に自生する常緑高木で雌雄異株。二、三月頃に花が咲き、四、五月頃に実がなる。実は一～一・五センチくらいで、表面に多汁質の突起が密生する。赤く熟した実は水分が多く、甘酸っぱくておいしい味がする。熟した実はジャムや果実酒に、青い実は塩漬けにして食する。樹皮と材にはタンニンが含まれており、天然の染料となる。沖縄では昔から「やまむむ」として親しまれ、農家の女性がかごいっぱいの「やまむむ」を頭にのせ、売り歩く姿をよく見かけたものである。

古謡でも山に入って「むん」を折ることを謡ったもの比較的多く見られる。

まず西表島網取の「早朝（ひとうむてぃ）に起きてぃよ朝ばなぬユングトゥ」（琉球大学八重山芸能研究会「第三十回　八重山芸能発表会パンフレット」二九頁）には次のように見える。

早朝（ひとうむてぃ）に起きてぃよ	早朝に起きて
朝ばなにすりてぃよ	朝まだきに
年寄りぬ　石せら道	年寄りが　石ころ道を
杖ばちき	杖をつきながら

クンクルミンガシ　通だら
あま向かいし　くま向かいし
見りばどぅ
鳥ぬ鳴け　ドワドワ
鳩ぬ鳴け　ドワドワ
鳴きぶり
頸すらし
首持たい
見りばどぅ
桃ぬ実れ　赤んたり
たぶぬ実れ　黒んたり
実りぶり
折り食んでぃ
取り食んでぃ
居かるけ
桃ぬ枝　サバサバ
たぶぬ枝　サバサバ
ありぶり

やっとの思いで通っている
あっちを向いたり　こっちを向いたりして
見ていると
鳥の鳴き声が　ドワドワ
鳩の鳴き声が　ドワドワと
鳴いている
頸を延ばし
首をもたげて
見ると
桃の実り様は赤く
桃の実り様は黒く
実っており
折って食べようと
取って食べようと
していたが
桃の枝は　サバサバ
たぶの枝は　サバサバ
だったので（枝は折れ）

ふんばりしてぃやんユー　　舉丸を割ってしまったとさ

なお、類似の内容をもつ鳩間の「友利道ユングトゥ」（琉球大学八重山芸能研究会「第十七回　八重山芸能発表会パンフレット」一八頁）および竹富の「高那ユングトゥ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一四五頁）では、老人が登って落ちた木は、単に「木」とのみあって、特定の木の名称は挙げていない。

石垣の「いぐじゃーまユンタ」（『八重山古謡』上巻二〇五頁）には、

桃山ぬ　ゆやんどぅ　　桃山のために
たぶ山ぬ　ちぃにゃんどぅ　　たぶ山のために
桃折ぶらば　子ぬ父　　桃を折るのなら　お父さん
水桃ゆ　折りょうり　　山桃を折って下さい

とあり、いぐじゃーま（人名）が山桃を折りに山に入るというので、水桃を折ってきて下さいと謡われている。同類の古謡として新城下地の「うふぬぴぃーだジラバ」（『節祭ジラバ集』三八頁）、平得の「うーぬざきぃユンタ」（『八重山古謡』上巻四〇八頁）があるが、特に後者では、

水桃から　折りょうり　　山桃を折って下さい
美味桃から　折りょうり　　美味しい桃を折って下さい

とあり、水桃の対句が美味桃（おいしい桃）になっている。これに対して白保の「たな取りジラバ」（『八重山古謡』上巻五三六頁）の最後の二句には、

家ぬ妻ぬ　桃折らば　　妻へのみやげの　桃を折る際は
山端ぬ　石桃　　山畑の石桃を

外どぅみ（妾）ぬ　桃折らば　　妾へのみやげの桃を折る際は
山底ぬ桃　折ろうり　　山奥の桃を折って下さい

と、船材を採りに山へ入ったギシャマが、妻へは石桃、妾へは山奥の桃を折って帰ったと謡われており、これらことから、水桃は美味しい桃、石桃は質の悪い桃のことであったことがわかる。それにしても妻と妾を水桃と石桃とで差別することをわざわざ謡っているのは、夫婦の不変の契りを謡った「野底浜ユンタ」と対照的である。

やまざみ・やんだる

和名はタコノキ科のツルアダンで、学名は Freycinetia formosana Hemsl. である。

海岸から山地にかけて生える大型の蔓性藤本で、断崖から垂れ下がったり、樹幹をよじのぼるように伸びていく。葉は細長い剣状で、枝の先の方に束生する。中脇裏面は突起し、逆向きの細い刺が疎らにある。茎の先の淡黄色をした美しい広卵形の苞の間から数個の肉穂花序を出し、特有の香りがある。苞は食用にもなる。

古見の「古見ぬ浦節」（『八重山民謡誌』二九四頁）には、次の歌詞がある。

山ざみぬ　節だき　　山ざみの　節のように
節かたさ　おうりみり　　足繁く　通って来て下さい
何時ん　おうり語ら　　いつでも　語りあいましょう

ここに見える山ざみとは山あざみ、すなわち山あだんのことである。その幹は節が幾重ねになっていることから、その節のように足繁く通ってきて下さいと謡っている。あだんの幹の特徴をよく観察し、それをうまく比喩的に表現したものといえよう。

西表の子守歌（那根亨『西表の方言と民俗』〈自家版、一九七七年〉九五頁）には、

コネマぬ父　帰りおーるんど　　坊やのお父さんは　やがて帰ってくるよ
山からぬ土産　何からら　　山からの土産は何だろうね
やんだろうば　持ちおるど　　やんだるを持ってくるよ
泣ふなよ　コネマ　泣ふなよ　　泣くなよ坊や　泣くなよ

とある。「やんだる」のどういうところを子供へのおみやげに持って帰ったのか、花か食用ともなる苞か、にわかに判断し難い。

やまふくん

和名はニレ科のウラジロエノキで、学名は Trema orientalis BL. である。

屋敷の周囲に植えられたオトギリソウ科のフクギとは異なり、山地に生える常緑の中高木を特に山福木と呼んでいる。幹は直立して、高さ五～十メートルくらいになる。樹皮は灰白色を帯びている。葉は卵状披針形で、先の方は次第に尖っている。葉の表面は緑色で、裏面は絹毛のため銀灰色をしている。核果は卵円形で黒く熟する。ウラジロエノキの名は、葉の裏が銀灰色で白っぽいことから名づけられたものである。生長の早い木である。

竹富の「マンノウマ節」（『八重山民謡誌』二一二頁）は、

やまふくんに　　山福木のように
ぬいでぃ生り　　抜き出た生まれの
マンノウマ　　マンノウマ

とあり、マンノウマ（真武能という役人）の生まれは山福木のようだと謡われている。山福木がまっすぐに上に伸びしかも生長が早いことから、非凡の秀才であった真武能の出生の比喩としたのであろうか。

また川平の「松金ジラバ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一九三頁）には、

桁でぃすや　　桁には
山福木　　山福木を
取りぃ出し　　取り出し

と見える。各地にある同古謡の中で「山福木」が謡われているのはこの川平のものだけである。

やらぶ

和名はオトギリソウ科のテリハボクで、学名は Calophyllum inophyllum L. である。

海岸近くに見られる常緑の高木で幹は直立し、高さ七～十二メートルほどになる。樹皮は灰黒色で厚く亀裂する。葉は倒卵状楕円形で硬い革質。表面には光沢があり、先は円頭でくぼみ、対生する。葉の中肋は裏面に隆起する。初夏になると、葉の付け根から出る総状花序に白い花を咲かせる。実は、三～四センチもある大きな丸い実で茶色に熟する。防風防潮林に適し、屋敷や畑の周り、公園や街路樹として利用されている。材は硬くて緻密なので用材として優れていて、指物・挽き物の他、船材、建築材としても用いられる。乾燥した樹皮を取り除いた核果はビー玉の代わりとして子どもの遊びに使われた。また種に穴をあけて中味を取り除けば笛になる。

古謡では、波照間のわらべ歌「いなま道ちゅらさ」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』五四頁）に、

いなま道美（ちゅ）らさ　　稲ま道が美しさは

やらぶ木ぬ美らさ　　やらぶ木が美しい
名石村美童　　名石村の乙女は
色ぬ美らさ　　色がきれいだ

と見え、名石村の乙女の美しさに待遇するものとしていなま道に生える「やらぶ木」の美しさが挙げられている。

また黒島の「やらぶ種子アユー」（『竹富町古謡集』第一集）は、愛しい一人っ子を旅に出した母親が身近にあるものになぞらえて息子の無事の帰還を祈ったものであるが、その中に、

やらぶ種子ん　　やらぶの種子のように
回り来よ　　転がって来なさい
一人子　　一人っ子
転び種子ん　　転がる種子のように
転び来よ　　転がり来なさい
たんか子　　一人っ子

とあり、やらぶの種子がころころ転がるように早く帰ってきて欲しいとの思いが謡われている。

さらに竹富の「くいちゃ踊り」の中羽の歌詞（『竹富島誌』一八八頁）には、

今年作たる　粟や　　今年作った粟が
やらぶぬ実るだぎ　　やらぶの実ように
稔るっかー　　豊作であったなら
大家　炊事屋ん作てい　　母屋も炊事屋も建てて

俵ば　ひたてぃばし　　俵を引き立てよう

とあり、粟の豊作とやらぶの実のなり様を結びつけている。「くいちゃ踊り」はもともとは宮古のもので、宮古のアーグ（『南島歌謡大成　Ⅲ宮古篇』二五六頁）にも、「今年蒔き種子ぬ　やらう（ヤラブ）ぬ　実いだき　稔らばよ」と似たような歌詞が見える。

「やらぶ」製の容器が出てくる古謡もある。大川の「世果報」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一二六頁）には、

やらぶバダスん　　やらぶ製のバダス（酒器）も
出だし飾りょうり　　出して飾って下さい

と、「やらぶ」で作ったバダスと称される酒を入れる容器が見える。この「やらぶバダス」は小浜の「山かしぬアヨウ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一六九頁）にも出てくる。また鳩間の「伊武田ユングトゥ」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』一三四頁）には、

米神酒　　米の神酒を
やらぶ皿に　　やらぶの皿に
しん立てぃ　　なみなみとついで

と、「やらぶ」で作った皿が見える。

一方、黒島の「野底浜アヨウ」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』一　六六頁）には、

クンミマタ淵に　生やきょーたる　　クンミマタ淵に生えている
やらぶ木ぬ　　やらぶ木が
古見船ぬ艫床なるとぅん　　古見船の艫床となっても

夫婦抜き　かなしゃー抜き　　夫婦の別れ、愛しい人との別れは
ならぬ　　あってはならない

と、「やらぶ」の木が古見船の艫床に用いられる程大木になるまで夫婦は一緒と謡われている。

ゆな（ゆうな）

和名はアオイ科のオオハマボウで、学名は Hibiscus tiliaceus L. である。

海岸線に多く見られる常緑の亜高木。幹は直立し、分枝が多く高さ四～八メートルくらいになる。樹皮は内皮が発達し、幾重にも重なり合っている。葉は卵円形で表面は艶があり、裏面は短い毛があり灰白色をしている。径十センチほどもある大きな花を夏季に多く咲かせる。花の色は黄色で、中心基部は暗紫色である。朝開いた花は夕方には橙色に変わり、形状を保ったまま散る。果実は卵円形で一、五センチ程度。防潮防風林として屋敷内にも植栽され、日常生活の中でいろいろと利用されてきた。葉はおにぎりを丸めたり、食べ物を包んだりするのに用いられた。トイレットペーパーとしても利用されたので、便所の近くに植えられることも多かった。近年、街路樹や緑陰樹として公園等にも植栽されている。また沖縄を代表するメロディーにのって県内外でも広く知られるようになった花である。

このように暮らしの中で身近に存在した植物ではあるが、意外なことに古謡に謡われることはあまりなく、新城の下地（しもじ）の「ざんとぅるジラパ」（『節祭ジラパ集』三〇頁）に、

ゆな山に　入り　　ゆな山に入って
ゆなかじぃば　剝げ　　ゆなの表皮を剝いで

と見えるくらいである。なお上地の「ざんとぅりぃユンタ」（西大舛高壱「新城島の節祭―巻踊のルールと唄の解説―」（自家製パンフ、一九七四年）では、

しるび山　まりゃ歩き　　しるび山を　さがし歩き
あだに山　まりゃ歩き　　あだん山を　探し歩き
あだなしば　切りとうし　　あだなしを切り取り
よなかじば　ばきぃとぅし　　よなかじの表皮を剝ぎ取って

と、「ゆな山」の箇所が「しるび山」となっている。

んみ

和名はバラ科のウメで、学名は Prunus mume S.& Z. である。

中国原産の落葉亜高木で、六メートルくらいの高さになる。早春、白色の花が前年の枝の葉腋に、二～三個集まって咲く。園芸品種が多く、現在、約四百種に達するといわれている。梅の実はシソの葉とまぜ、塩漬物として食用、古くは薬用とされたが、近年は果実酒や梅干し、ジャムなどに利用されている。日本の文献では『古事記』『日本書紀』『風土記』等には見えないが、『万葉集』には一一七首の梅という言葉の入った歌が収録されており、万葉歌人が梅の花を好んで詠んだことがうかがわれる。

八重山の歌謡にも梅が出てくる。「古見ぬ浦節」（『八重山民謡誌』二九三頁）によれば、「梅香しゃ女童」（但し現在の安室流の歌詞は「梅ぬ花女童」となっている）とあり、乙女の美しさを梅の花の香りに喩ている。また、「黒島口説」（大浜安伴『声楽譜附　八重山古典民謡工工四』下巻九三頁）には「しんとぅ心は梅桜　匂い引

かさる袖衣　花の女童引き連りてぃ」という歌詞がある。

「目出度節」（安室流協和会『八重山古典音楽工工四　全巻』三五頁）の「松竹梅」の歌詞では、

ぬきばぬ梅は　　軒近くに咲く梅は
初春ぐとぅに　　春が来るたびに
花ん匂ん勝るなり　　花の色も匂いもさらに増して美しいことよ

と、梅の花と匂いのすばらしさが謡われている。

「ぼすぼー節」（『八重山民謡誌』一七二頁）には、

女童ぼすぼー　何ぼすぼー　　乙女の腰巻きは　どんな腰巻きか
紺地なーぬ　梅ぬ花　　紺地の梅の花

と、乙女の腰巻きは木綿を紺染めにした梅の花と謡われているが、喜舎場永珣氏は、これを女性の月の物による汚れを比喩的に表現したものと解している。

なお石垣の「古見ぬ浦ぬブナレーマユンタ」（『石垣村古謡集』二八頁）は、西表島古見村のブナレーマが、織り上げた御用布を納めるため蔵元へ行き、検査に合格しての帰りに大和屋や沖縄屋に立ち寄り、色を売っておみやげを持ち帰るというものだが、代償はそれぞれたった一個の品物であった。その沖縄屋で得たものとして「梅の露」という言葉が見える。

沖縄くやーからぬ　儲物（もうけぬ）　　沖縄屋からの儲け物は
んみぬつよーま　あかびてぃーじ　　梅の露ただ一個

「梅の露」が植物の梅とどのような関係にあるかは今のところ不明だが、参考までに挙げておく。

（2）　草本類

かにん

和名はブドウ科のエビヅルで、学名は Vitis ficifolia Bunge である。

別名リュウキュウカネブ、また俗称としてヤマブドウとも呼ばれている。海岸近くから山地の林縁、やぶ等に見られる雌雄異株の常緑のつる性植物。茎は葉と対生する巻きひげで他の物に巻きつき、長さ三～六メートルくらいになる。葉は心状円形で三～五に浅裂し、下面には灰色から褐色の綿毛が密布する。花は淡黄色の小さな花が円錐花序に密に咲く。実は球形で小型のブドウのように房状につき、後に黒褐色に熟する。実は食べられるが渋みがあり、美味ではない。ツルの節と節を切り取ったクダを口に含んで吹いた時出てくる汁液が目薬の代用として用いられた。

石垣の「しゃがむやー」（『八重山古謡』上巻三三〇頁）というユンタは、夜中に女の家に行き、炬火の明かりで女の眉・目・鼻・口・胸・お腹・そして下半身等を照らしてみた光景、さらには交接の様子を比喩的に謡ったものであるが、その中に、

目ゆ見りば　くれ何?　　目を見たら　これ何だ
うんかにふん　変わらぬ　　うんかにふんにそっくりだ

と見え、女の目をヤマブドウの実に喩えている。「うんかにふん」の「うん」は「鬼」の意味で「かにふん」を形

容する語である。

また与那国の家（やー）タカビの一つ「だとだぎ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一一三頁）には、

しぶりかにんば　糸にして　　しぶりかにん（の蔓）を糸にして

と見える。「しぶり」の意味は不明だが、恐らく「しゃがむやー」の「うん」同様、「かにん」を形容する語であろう。

川平の「松金ジラバ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一九三頁）にも、

桁でぃすや　　桁は
かにふ葛（かぎ）　　かにふの葛で
やだそうぬ　　あったそな

と見えるが、各地にあるこの種の古謡の中では、川平の古謡にのみこの植物が謡われている。

かや・がや

和名はイネ科のチガヤで、学名は Imperata cylindrica Beauv. var. major C.E.Hubb. である。

海岸近くから山手までの日当たりの良い原野や路傍、荒地、畑地等いたるところに自生する多年生草本。根茎は白地で細長く、地中を縦横にはい広がりふえる。葉は線形披針形で、長さ二十～六十センチくらいになる。茎の頂きに銀白色の綿毛のような花をつける。ぎっしりと群生することが多く、花の時期には一面白い穂に被われた美しい光景を見ることができる。長く生長したものは、茅葺き屋根や壁の材料として用いられる。またこれを束にしてトウヅルモドキの茎で巻くように編み上げ、大なべの蓋や箒などを作り生活の中で利用した。根茎は、しゃぶると

甘味があり、薬用となる。

「かや」を題材にした古謡は多い。「松金ユンタ」（『八重山古謡』下巻四三五頁）には、八重山の頭（かしら）になったマチィンガニが首里王府の拝式に臨席する際の正装を謡った箇所に、

白絹や　　白絹は
かやぬばな　　茅の花の
たらし　　ようだ

とあり、茅の花が衣装の白色の象徴とされている。

登野城の「大浜村（はーま）うやきよう」（琉球大学八重山芸能研究会「第十一回　八重山芸能発表会パンフレット」一二頁）は、大浜村の「ウムチェマ」と「ミイゴマ」は縁があって夫婦になったが、縁結びをして幾日もたたないうちに、「ウムチェマ」が目が見えなくなり、「ミイゴマ」は鼻が折れてしまった。しかしそうなったからといって、相手を見捨ててはいけないよ、という内容のユングトゥであるが、夫婦の不変の契りの比喩として、

網張ぬ茅ぬ　　網張に生える茅が
バフ茅とぅ　　バフ茅として
すらりとぅん　　刈り取られても

と謡われている。すなわち網張というところは湿地帯で茅はあまり生長しないが、それがバフ茅（いろいろなものに使用できるくらい高く伸びた茅）のようになることはほとんどありえない。しかしありえないことに夫婦の契りの永遠性を求めているのである。こうした発想は「野底浜アヨウ」にも見えるところである。

「かや」の利用が見られるものもある。西表租納の「大野がやユングトゥ」（『八重山古謡』下巻四八九頁）に

は、

大野茅　しばゆい　　大野原の茅を　標として結い
すりまらぎ　しばゆい　　結んで　標として結い
女童ば　しばゆい　　乙女を　標として結い
肝ば見り　しばゆい　　心を見て　標として結い

と、茅の両方の先を結ぶことによって所有あるいは禁止を意味したり、魔除けにもなった。ここでは乙女に対して標をたてることの比喩として茅が用いられている。

茅の用途を謡ったものもある。波照間の「まやしくマヤびらアユ」（『八重山古謡』下巻六〇二頁）は、まやしく村のマヤという兄が女性のために骨身を削って働いたことを謡ったものであるが、その中に、

冬なりば　　冬になると
かやみなぬ　　茅縄の
帯しめ　　帯をしめ
夏なりば　　夏になれば
ばらみなぬ　　藁縄の
いしいしい　　鉢巻きを
しょうり　　して

とあり、茅で綯った帯が見える。

また大川の「ちぃとぅべーユングトゥ」（『八重山古謡』上巻六〇頁）に謡われた「ちぃとぅべー」とは茅で作っ

た笠のことである。

しかし「かや」は主に屋根の材料に使われる。例えば竹富の「家ぬかざい」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一一三頁）には、

ましぬ茅葺きてし　　よい茅を葺いて
引き金やうすいてし　　引き金は押さえにして

とある。また石垣の「網張ぬみだごうまユンタ」（『八重山古謡』上巻六一頁）には、

下ぬ家や　　下方の家は
瓦葺きでんどぅ　　瓦葺きであるが
上ぬ家や　　上方の家は
茅葺きでんどぅ　　茅葺きである

と見える。また石垣のユンタ「くんぬてーず」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』三一七頁）は、大浜の「古見や辻ジラバ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』二二一頁）とほぼ同じ内容であるが、大浜の古謡にはない、次のような歌詞が見られる。

茅し家ば　　茅の家を
苫し家ば　　苫の家を
造りょうり　　造って
茅し家ぬ　　茅の家の
苫し家ぬ　　苫の家の

中なんが　　中に

ちなみに大浜では、「茅し家　苦し家」は「番所屋　ゆらい屋」と謡われている。

茅も生長すると、ちょっとした隠れ場になる。波照間の「ナカマイジラバ」（『八重山古謡』下巻六五一頁）では、ナカマイと称する女子が山に薪を取りに出かけ、偶然に出会った昔の恋人に誘われ、恋を語り合う場所として、

茅ぬ下　　茅の下や
ゆしぃき下　　ススキの下が
ありどぅし　　あるではないか
茅ぬ下　　茅の下や
ゆしぃき下　　ススキの下は
たまはんちょ　　いやです

と、茅の下が挙げられている。

また宮良の雨乞いに関わる「すばんがーにカンフチィ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』五六頁）には、

天ぬ神加那志　雨欲しゃぬ　　天の神様　雨が欲しい
水元ぬ神加那志　水欲しゃぬ　　水元の神様　水が欲しい
大野茅枯り程　　大野の茅が枯れる程

と、旱魃の指標の一つとして大野の茅が枯れることを挙げている。

枯れた茅は火がつきやすい。ばなり焼きを造る工程を謡った竹富の「ばなり焼きアヨー」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一七六頁）には、

日三日　干し晒し　　三日間干し晒し
日五日　干し晒し　　五日間干し晒し
赤土ば　くなし　　赤土をこね
白土ば　くなし　　白土をこね
土鍋ば　造り　　土鍋を造り
泥鍋ば　造り　　泥鍋を造り
枯茅し　微温び　　枯れた茅を微温火して
枯薄(かりすすき)し　焼きすけ　　枯れたススキで焼きつけ

と、枯れた茅火で焼くことが見える。

また石垣のユンタ「しゃがむやー」（『八重山古謡』上巻三二九頁）によれば、

ゆしぃき炬火　　ススキの炬火は
あるむぬ　　たくさんある
茅炬火ん　　茅の炬火も
してぃむぬ　　茅の炬火も捨てる程ある

と、これを炬火にして用いている。

さでぃふきゃ

和名はヒガンバナ科のハマユウで、ハマオモトともいう。学名は Crinum asiaticum L. である。

海岸の砂浜や岩場に多く見られる大型の多年生草本。葉は披針形、先は尖り、長さ三十〜百二十センチくらいになり、多肉質の白い葉柄は何枚も重なりあって巻き、太さ五〜十センチくらいの円柱状になって茎のような感じになる。春から夏にかけ葉の間から高さ三十〜六十センチくらいの花茎を出し、先端に白色をした芳香のある美しい花を咲かせる。

茎の部分は、白くてきれいな層が幾重ねにも重なっていて、広げて皿の代用とした。また玩具にも用いた。茎の両端を切り表皮をはがしてビニールのような薄い皮を筒状にとり、その片方を縛って片方からくだで吹いて遊んだり、風船または水玉にし、それに木の実をしぼって色をつけたりして遊んだ。葉を火の中に投げ込み、はじけた薄皮をとって、ねぶとの吸い出し等にも利用した。

この植物は、黒島の「んざとうらじるくぶしユンタ」（『八重山古謡』下巻一九一頁）に次のように出てくる。

さでぃふきゃば　浜木綿を
かぶしぃめば　カブシ目を
あきゆ取り　的として
さでぃふきゃや　浜木綿の
かぶしぃめぬ　カブシ目の
ばしから　端の方から

古謡の内容は、ンザトウラ家のジルクブシという男が、「さでぃふきゃ」を輪切りにしたもの的にして弓を射ていたら、それを見ようと人々が集まってきた。その群衆の中から「いばんとぅ家」という富裕な家のマトゥルギという女を選んで妻にしたというものである。

また小浜の「南さこだジラマ」（『八重山古謡』下巻三四八頁）では「浜さきぶ」と出てくる。この古謡の内容はせっかく美人に生まれながら、西表島南風見村という寒村に生まれたがために、よからぬ風評を受け身の不遇をかこっているが、もし主邑の古見村に生まれていたら役人の賄女になることができたものを、というものであるが、美人の生まれであることの比喩として次のように謡われている。

はまさきぶ　浜さきぶの
びしかぬ　真皮のような
生りやだそ　生まれであった

似た歌詞は石垣島野底の「マツニャマ節」（『八重山民謡誌』一九二頁）にも見える。

はまさでぃく　浜さでぃくのように
どぅ白かい　体が白く美しい
生りばし　生まれをして

ここでは、ハマユウの茎の白さがマツニャマという美女の比喩として謡われている。

だでぃふ

和名はイネ科のダンチクで、学名は Arundo donax L. である。

海岸近くから山手の畑地や原野、牧草地周辺に自生する低木状の大型多年生草本。幹は木質状で直立または斜上、疎に分岐して高さ二～四メートルくらいになる。葉は線形で、幅二～七センチ、長さ三十～六十センチくらいで先は次第に尖る。秋頃に赤紫色の小さな花が頂生の円錐花序に密につき大きな穂状になる。以前は畑地の防風林とし

て植えられた。また木質化した茎は竹の代わりに、茅葺きの茅を押さえるのに用いられた。また掘立小屋の場合、それを叩きならし茅と組み合わせつつ丸竹で押さえ、ふがら縄で締めくくって周囲の壁にした（『石垣市史』民俗上、三八三頁）。

この植物は川平の「節ジラバ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一八九頁）に出てくる。すなわち、富貴な老夫婦を誉め讃えた後、

だでぃふ茎　玉水　　だでぃふの茎の玉水
茎溜まる　玉水　　茎に溜まる玉水
茎溜まる　玉水　　茎に溜まる玉水で
身撫でぃ　しゃびら　　身体を撫でましょう

と謡われているが、ダンチクの茎に溜まる玉水で撫水をするのは、若返る、または新生することを意味している。

鳩間の「家タカビ」の一つ「あーぱーれーの唄」（『八重山古謡』下巻四一七頁）に、

だでぃく竹ば　　だでぃく竹を
あむぬばし　　編み物にして

と見える「だでぃく竹」も「だでぃふ」すなわちダンチクのことであろう。但し宮良当壮『八重山語彙』（『宮良当壮全集』8所収）および森田孫榮「八重山石垣市の住」（『八重山芸能文化論』第二部第二章一）では「だでぃふ」を島葦と解している。

とぅんな

和名はキク科のアキノノゲシで、秋に咲くノゲシの意でつけられた。学名は Lactuca indica L. である。日当たりのよい原野や道ばたに生える二年生草本。茎は直立し、高さ五十～百センチくらいに達する。葉は長楕円形披針形で、羽状に分裂し、互生する。頭花は黄色の舌状花からなり、円錐花序につく。葉をちぎると白汁が出て、苦みがあるが、食べられる。家畜の餌としても使用される。

この植物は「山崎ぬアブジャーマ節」（『八重山民謡誌』二五八頁）に次のように出てくる。

とぅん菜茎ぬ　故やんどぅ　　とぅん菜の茎（新芽）の故に
んがなびちぃぬ　ちぃにやんどぅ　　んがなの若芽のために

すなわち、この歌の内容は、山崎村のアブジャーマ（年寄り）が大工の娘ンギシャマと司（神女）の娘ナビシィケを騙したというものだが、どうして若い娘二人が、事もあろうにあんな年寄りに騙されたかというと、「とぅん菜」の新茎と「んがな」の若芽を与えられたからだという。

喜舎場永珣氏によれば、「とぅん菜」も「んがな」も味噌のあえものにするとおいしいので、恐らく「味噌あえ」を与えて騙したものであろうというが、当を得た解釈であろう。宮良当壮氏が紹介したユングトゥ「兄と妹」（『宮良当壮全集』18、四七二頁、『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一二七頁）には、

長間出でえ　　長間というところへ出て
いしゃぬめー本　　いしゃぬめー（食用野草）の根を
選び引き　　選んで引き
真地逗入り　　真地というところへ行って

とぅのー菜茎　　とぅのー菜の茎を
選び摘み　　選んで摘み
時入らなあ　　時をおかずに
家持ち這入り　　家に持って入り
暇くまなあ　　暇をとらずに
家持ち来い　　家に持って帰り
蔬齏ば齏やあ　　和え物を和え
妹と二人　　妹と二人で
兄と二人　　兄と二人で
旨々と　　おいしく
んきょうり　　いただき
香々と　　香ばしく
んきょうったゆう　　食べたよ

と、「とぅのー菜」の茎を和え物にしたことが見えるからである。

ばそー

和名はバショウ科のリュウキュウバショウ（イトバショウ）で、学名は Musa balbisiana Colla である。東南アジア原産の多年生草本で、幹は太く、円柱状で直立する。葉は大きく、外側に反り返り、下面は白っぽい

粉を帯びる。山の斜面や川辺りに自生しているが、糸をとるために栽培もされている。実は小さくて種子が多く、堅いので食用には適さない。幹の部分（葉の基部）の繊維からとれた糸で芭蕉布が作られる。葉は食べ物や弁当を包んだり、皿代わりになったりした。法事や祝い事の際の大皿の食材を並べたり、覆ったりするのにも使われた。カーサー餅といえば沖縄本島では、ゲットウの葉を用いることが主流だが、八重山地方では豊年祭にイトバショウの葉で餅を包む。また高熱が出た時、病人の額や体に葉をあてがい、熱取りとして利用した。

古謡では、その芯ないしは茎の白さを人間の色白さに喩えている。例えば大浜の「芭蕉やびちぃジラバ」（『八重山古謡』上巻四七四頁）には、

芭蕉やびちぃ　　芭蕉の芯は
白さ　生りばし　　白い生まれ

と、芭蕉の芯が白色であることを謡い、役人の子は出生からして役人のような生まれで、親の血統のよいところの子は親に似てすばらしい子が生まれる比喩としている。

また石垣の「インダレユンタ」（『八重山古謡』上巻二六七頁）は、富貴な家に生まれ、着こなしもよく、書道にもたけていたというインダレという男を褒め称えたものであるが、

いんだれぬ　生りや　　いんだれの生まれは
芭蕉ぬ茎（ぐき）　白さ生り　　芭蕉の茎のような白い生まれ

と、ここではインダレという個人の出生についての比喩として芭蕉の茎が謡われている。

また「ぼすぼー節」（『八重山民謡誌』一七二頁）には、

ぴらまぼすぼー　何（ぬ）ぼすぼー　　男の褌は　どういうものか

芭蕉なぬ　紅露染め　　芭蕉布を紅露という染色材料で染めたものだ

と、糸芭蕉から取った繊維で織った芭蕉布の褌が見える。

新川の「まやユンタ」（『八重山古謡』上巻七八頁）には、

芭蕉縄さーり　　芭蕉の縄で
かいぶられ　　掻き縛られ
藁縄さーり　　藁縄で
ふんたばられ　　がんじがらめにされ

と、芭蕉で綯った縄が見える。

なお黒島の「いしがーぬ金盛ユンタ」（『八重山古謡』下巻二一三頁）には、芭蕉の幹で作った船が見える。

芭蕉船ば　作りょうり　　芭蕉の船を作って下さい
虫ぬ船　ぱいばし　　虫の船をこしらえて下さい

ここでの船は、作物に害虫がつかないように、昆虫を捕まえて海に流す虫払いの行事に用いられる船のことである。但し古謡は宮古の与那国征討に関わるもので、金盛という豊見上が親戚関係を結ぼうと与那国に渡ったが拒否されたため、虫払いの芭蕉の船に炬火をつけて海に流して帰島するかのように見せかけ、安心して寝静まった時を見計らい島人を殺害するが、乙女たちの決死の行動により殺戮を止め宮古に帰ったという内容である。

この古謡の中では、

芭蕉本に　ないばし　　芭蕉の株をなぎ倒すように
ジプタ竹に　切りばし　　ジプタ竹を切り倒すように

と、もう一ヵ所芭蕉の記事が出てくるが、ここでは島人の殺害状況の比喩に用いられている。

びーる

和名はサトイモ科のクワズイモで、学名は Alocasia odora Spach である。

荒山地や原野、林縁、畑の周辺など身近に見られる大型の多年草本で、大きなものは高さが二メートル近くにもなる。葉は長い柄のある広卵状の矢じり形で、茎の先の方に束生する。花梗は葉のつけ根から出て肉穂花序を包む。仏炎包は黄緑色。実は赤く熟する。根茎は大きなイモとなり、サトイモや田芋に似ているが食べられない。和名はこのことから名づけられたものである。草全体が有毒で、液汁が皮膚につくとかゆくなり、炎症をおこす。つやのある広い葉は、物を包んだり、かぶせたりすることに用いられる。

この植物は竹富の「松金ユンタ」（『八重山古謡』下巻四三五頁）に、松金が頭職を拝命し、正月早朝の遙拝式に臨席する時の礼服の色の比喩に用いられている。

青絹や　　青絹布の衣装は
びーる山　　びーる山の
たらし　　ようだ

すなわち、松金が着た青絹布の衣装は山にクワズイモが生い茂った光景のように青々と輝いているというのである。

ぶー

和名はイラクサ科のマオで、学名は Boeheria nivea Gaudich である。

高さ一～二メートルにもなる亜高木。葉は広卵形で長さ八～十五センチにもなり、裏面には白毛がある。花は円錐花序につくが、あまり目立たない。葉や茎をちぎるとほのかな芳香がある。一般に苧麻と呼ばれており、樹皮から繊維がとれる。その繊維のことも「ぶー」とよぶ。苧麻が栽培される以前は、山野に自生するノカラムシを利用していたようで、一四七七年に与那国島近海で救助された済州島の漂流民の見聞記（『季朝実録』所収）に、「麻・木綿なし。亦蚕を養わず。ただ苧を織りて布となす。」と見える苧はそれであろう。十七世紀に入り琉球王府は苧麻の栽培を奨励し、「ぶー」で織られた布は婦女子の人頭税として王府へ貢納された。

沖縄では、ひどく驚いた時や事故に遭った時など、魂の一部が抜け落ちると信じられ、魂を元に戻すマブヤーグミの風習がある。八重山ではそのマブヤーグミの際に「ぶー」が用いられる。例えば繊維状の「ぶー」にいくつかの結び目を作り、輪にして手首や首に巻いたりする。

歌謡の中では、ほとんどが貢納布との関連で出てくる。まず平得の「新城ユンタ」（『八重山古謡』上巻三七六頁）は、アラグシクと称する村に生まれた女童について、

いみしゃから　　幼少の頃から
ぶうん女が　　苧麻を紡ぐのが上手な娘が
生りやとぅり　　生まれていた
（中略）
なら櫃ぬ　　自分の櫃の

満ち余り　　満ち余る程
ぶばうみ　　苧麻を紡んでいた

と謡われている。また竹富の「はらだてぃぬマブリョウマユンタ」（『八重山古謡』下巻三三頁）にも、

五歳な　　五歳の時には
ぶーまんーみ　　苧麻糸を紡いで
名取らりよ　　賞賛された

と、織物の天才少女のことを謡った古謡がある。

さらに波照間の「古見浦ぬみやらびアユ」（『八重山古謡』下巻六五六頁）「なしぃな村船頭ぬ家ジラバ」（『八重山古謡』下巻五七一頁）「まへらちユンタ」（『八重山古謡』下巻六六一頁）にも、「しるぶむとぅ（白い苧麻糸）」を紡ぐ婦女子が謡われている。

新城島の苧麻は特に良質だったようで、竹富の「仲筋ぬヌベーマ節」（『八重山民謡誌』二二七頁）には、一人娘のヌベーマを新城島の役人の晴女として嫁がせたのは、

赤甕ぬ　ゆぃんどぅ　　赤甕の故に
しるみぶぬ　欲しゃんどぅ　　白い苧麻が欲しいために

と、赤甕と白い苧麻のためだと謡われている。

新川の「大本嶽アヨウ」（『八重山古謡ウ』上巻二七七頁）に、

赤苧麻　　赤苧麻の
二十舛ぬ　　極細上の

御用布　　御用布である

と見える赤苧麻の布は、最高級の御用布であったようである。

大浜の「マミドウマジラバ」（『大浜の古謡集』三二頁）には、

あじぃらぷーぬ　生いそーんや　　あじぃらぷーば生えるように
かたがーぷーぬ　生いそーんや　　かたがーぷーが生えるように

と、「あじぃらぷー」「かたがーぷー」と出てくるが、「あじぃら」は畦、「かたがー」は風が吹きこまないようにした場所の意味であるから、それぞれ苧麻を植えた場所による名称であろう。

竹富の「深山蜘蛛ユングトゥ」（『八重山古謡』下巻七五頁）は、ある男が「ぶむとぅ無ん　蜘蛛ざぎどぅ（苧麻糸のない蜘蛛でさえも）」網を張り蠅や蚊を捕まえているとして、発奮し成功をおさめたという内容の古謡であるが、ここではぶーの糸と蜘蛛の糸をからめた巧みな表現がなされている。　また波照間に吹く風について謡った「くくる嶽アユ」（『八重山古謡』下巻五六二頁）では、

我が親ぬ　　わが親が
植びやる　　植えてある
まぶんだき　　苧麻のように

と、風根の強さを苧麻の根の強さに喩えている。

まむてぃかんだ

石垣の方言ではピパージィという。和名はコショウ科のヒハツモドキで、学名は Piper retrofractum Vahl で

ある。

インドシナ・ジャワ・マレー原産のつる性草本で、四メートルくらいの長さになる。葉は長楕円形で、先は尖り、表面につやがある。果実は円錐形で長さ三センチくらいで、やがて赤く熟す。葉や実には独特の香りがあり、食用に供される。すなわち、若菜を細かく刻んで炊きご飯に入れたり、山羊汁に入れて食す。また辛味がある実は、蒸して乾燥させ、粉にして香辛料を作る。

この植物は与那国の「かんた世ドゥンタ」（『八重山古謡』下巻六七九頁）に次のように見える。

まむてぃかんだ　　まむてぃかんだ
ぐしくかんだ　　石垣にからむ蔓が
はゆたば　　桑の木においかぶっていた
まむてぃかんだ　　まむてぃかんだ
ぐしくかんだ　　石垣にからむ蔓を
とぅりやはんし　　取り除き

なお、以前は八重山地方のどの集落でも石垣にはっているのを見かけたが、ブロック塀の普及によりかなり少なくなった。対語の「ぐしくかんだ」のぐしくは石垣のことであるから、こうした植物の特徴から名付けられたものである。

まんつぁ・やまくにぶ

和名はサクラソウ科のモロコシソウで、学名は Lysimachia sikokiana Miq. である。

石灰岩地帯の林野に多く見られる多年生草本。茎は直立して高さ二十〜七十センチくらいで、葉は膜質で卵状披針形をしている。黄色の鐘状の花が葉のつけ根から細長い柄を出し、下向きに咲く。果実は球形で白色である。葉を乾燥させると独特な香気を発散し虫除けにもなるので、家の中や玄関に吊り下げたり、箪笥の中に入れたりする。

この植物は与那国の「すゆりでぃぬドゥンタ」（『八重山古謡』下巻六九一頁）に見える。すなわち首里の子が傾倒した女性について次のように謡われている。

うみやすぬ　かだいや　　思っている女性の匂いは
そよりまんた　かだいどぅす　　そよりまんたの匂いがする

恐らく、その女性はいつもモロコシソウの匂いが染みついた衣装を着ていたのであろう。

また小浜の「ひゃんだん岳アヨウ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一六九頁）では、ひゃんだん岳の上の道は山乙女の通う道、下の道は磯乙女の通う道だといい、磯藻の匂いがする磯乙女に対して、

山女童ぬ　かんざや　　山乙女の匂いは
山九年母ぬ　かんざとす　　山九年母の匂いがする

と、山乙女の匂いは山九年母の匂いがすると謡われている。山に住んでいるとモロコシソウがいつでも手軽に得られるため、その乾燥させた葉から出る芳香が衣服や体に染まっていることを謡ったものであろう。

ゆしぃきぃ

和名はイネ科のススキで、学名は Miscanthus sinensis Anders. である

各地の原野に大型の多年生草本で、大きなものは、高さ二・五〜三メートルにもなる。沖縄ではススキの名のつ

く植物に、トキワススキ、ススキ、ハチジョウススキ、イトススキ、ヨシススキ、ヒトモトススキなどがあるが、ススキの仲間は前の四種である。ススキの名は「すくすく立つ木（草）」の意味だとされている。

八重山では昔から十五夜にススキを供える習慣がある。葉を根本から切って魔除けのサンを結んだり、細かく切って堆肥を作るなど、生活の中でも利用されている。また花が咲き終わったあと、穂を束ねてほうきも作る。

こうした「ゆしぃきぃ」は各地の稲作に関わる歌謡の中で謡われている。

川平の「まゆんがなし」が唱えるカンフチィ（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』二一頁）には、

ゆしぃきぃだき　　ススキのように
いばいだき　ぬんぐとぅに　　力芝草のように
むとぅい　さかい　　繁茂して

とあり、西表租納の「稲が種アヨウ」（『八重山古謡』下巻四六五頁）と「田植びジラー」（『八重山古謡』下巻四九五頁）にも、

ゆしぃきぃだき　　ススキのように
いばい草　　力芝草のように
むとぅようり　　分蘖して繁茂して下さい

とある。また竹富の「根うりユンタ」および「まみどー」には、

ゆしぃきぃだぎ　栄りょうり　　ススキのように栄えて下さい
いばんだぎ　むとぅようり　　力芝草のように繁茂して下さい

とあり、与那国の「稲が種子アヨウ」（『八重山古謡』下巻六七五頁）には、

どぅしきだき　できらしょうり　　ススキのように　成育させて下さい
いひやだき　　できらしょうり　　力芝草のように　生長させて下さい

とある。「波照間島節」（『八重山民謡誌』四〇〇頁）にも同様な歌詞が見える。

このようにススキは強靭な根を有するため、稲の発育をそれにあやかる意味が込められているのである。

一方、ススキの茂みは人目につかない場所でもある。波照間の「ナカマイジラバ」（『八重山古謡』下巻六五一頁）には、「茅ぬ下　ゆしきぃ下　ありどぅし」と見え、登野城の「あかんに田ユンタ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』三五九頁）にも「ゆすきむらし　かにんきーぬ　側なんが」男女が腕や股をからめて寝たことが謡われている。

しかし竹富の「イダフンユングトゥ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一四四頁）に、イダフンビギローマという男が、畑に出て雨が降ってきたので「ゆしきぬかたんが　すでぃちぬかたんが　居りてぬ思いうどぅ」とあるような、雨宿りできる場所ではない。

なお枯れたススキは茅と同様、火を燃やすのに適している。ぱなり焼きの工程を謡った竹富の「ぱなり焼きアヨー」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一七六頁）には、「枯ススキし　焼きすけ」と見える。また与那国の「ゆなはは節」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』六一八頁）では、月夜の浜遊びで与那覇原の乙女を見初めた男が、急いで家に戻り、おばあさんに彼女を紹介しようとするが、暗いので夜が明けるまで待ちなさいといわれ、夜明けまで待てない、今すぐ自分が選んだ乙女を見て欲しいと、

藁炬火（たい）んでん　あいどする　　藁の炬火もあるではないか
どしきたいんでん　ありどす　　ススキの炬火もあるではないか

藁炬火んき　火ばくみて　　藁の炬火に火を入れ
どしきたいば　あがらし　　ススキの炬火で明るくし

とせがむ様子が謡われている。ここでは藁の炬火と並んでススキの炬火が見える。これらの炬火については、石垣の「しゃがむやー」にも見える。

ゆり

和名はユリ科のテッポウユリで、学名は Lilium longiflorum Thunb. である。

海岸近くの岩場から山裾の原野にかけて見られる多年生草本で、沖縄では単にユリという場合にはこの種を指す。地下には球状または扁球形の鱗茎があり、鱗片は淡黄色をしている。葉は線状披針形で先は尖っている。春に芳香のある純白色の美しい花を咲かせる。

この花は、小浜の「うろんつぃんぬジラマ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』二四六頁）に、

百合ぬ花　　百合の花が
白さ美しゃ　　白く美しく
咲きばし　　咲いている

と謡われている。

また新城の「くいぬばな節」（『八重山民謡誌』二六六頁）には、百合の花の色と白いカカンをかけた、次のような歌詞が見える。

大道頂登てぃ　　大道岡の頂上に登って

東かい見りば　　東の方を見ると
百合ぬ花でぃ見りば　　百合の花と見ていたのは
まるが下装　　マル（という名の女性）のカカンではないか

首里・那覇で作られ、八重山に伝播したと思われる小浜の「はびら」（琉球大学八重山芸能研究会「第九回　八重山芸能発表会パンフレット」九頁）という若衆踊りの「出羽」の歌詞の一節にも、

春や野ん山に　　春は野も山も
百合ぬ　花盛い　　百合の花盛りである

と見える。

んがな

和名はキク科のホソバワダンで、学名は Ixeris lanceolata Steff. である。

海岸近くの岩場から山裾にかけて見られる多年生草本。茎は時に木化し、高さ十センチメートルくらいになり、多数の枝を四方に伸ばして広がる。葉は、へら状長楕円形で、先は円いか、または鈍く尖り、茎や枝の先にロゼット状に集まる。苦味が強く、胃腸薬になる。生葉の青汁を服用する他、肉汁や魚汁に入れて食べる。特に海岸の岩場で潮風を受けているものほど薬効が大きいといわれる。

この植物は、前述した「とぅんな」と同じく「山崎ぬアブジャーマ節」の一節に出てくる。また宮良当壮氏が紹介した「越地節」（『宮良当壮全集』11、三六六頁）には、

親ぬ持たしょうる夫や　　親に押しつけられた夫は

磯端ぬ　んがな　　磯端に生えているんがなのようなもの

とある。

二　謡法上の分類

八重山歌謡全体の中に占める植物群は、動物や天体および自然現象を凌駕しており、その種類の多さに驚かされる。しかしながら「山の木節」や「山樫根アヨウ」「野底浜アヨウ」「ぴんに木ユンタ」のように、一つの古謡の歌詞のほとんどが植物を題材にしているものもあるが、多くの叙事的古謡では、長い歌詞の一節において植物が取り上げられているにすぎず、その中には主題とは直接関係がない場合もある。また同一植物でも歌謡によって取り上げ方が異なっているものもある。ここでは、個々の植物が八重山歌謡の中でどのように取り上げられているかを鳥瞰するために一つの分類を試みておきたい。

I　比喩的表現

（イ）人間に関わるもの

①あでふ（アデク）の堅さ→人間の体の丈夫さ…「川平のカンフチィ」

②うしく（アコウ）が松を抱く→恋人を抱く…「平良とどろき」

③かしい（ウラジロカシ）枝の交差→男女の交わり…「ぱいさきよだジラバ」の

④がじまる（ガジュマル）気根の抱石→恋人同士の抱擁…「とうがにすざー」

〃　木の曲がり→人間のひねくれた心…「びんに木ユンタ」

〃　枝持ちのよさ→乙女の容貌のよさ…「大浜がじまる節」

⑤かねーら（ハマゴウ）の木から船材が取れるまで→不変の契り…「野底浜ユンタ（アユ）」

⑥きだ（リュウキュウコクタン）の枝葉の繁茂→村の繁栄…「マンノウマ節」

⑦きゃんぎ（イヌマキ）から船材が取れるまで→不変の契り…「野底浜ユンタ（アユ）」

⑧くうじ（トウヅルモドキ）を割いた形→腹を上にして寝た姿…「ぱいふたフンタカユングトゥ」

⑨くば（ビロウ）　葉が風で左右に揺れる→噂の否定…「くいがま節」

〃　木から船材が取れるまで→不変の契り…「野底浜ユンタ（アユ）」

⑩くばでーさ（モモタマナ）の枝持ちのよさ→乙女の身持ちのよさ…「石ぬ屏風節」

⑪さくら（ヒカンザクラ）の花の美しさ→乙女の美しさ…「古見ぬ浦節」「桃里節」

⑫しぃとぅちぃ（ソテツ）　焼けた蘇鉄→西表の乙女の色黒さ…「竹富ぬぎらいちぇーまユンタ」

⑬じぐ（デイゴ）から四寸角の材木が三本取れるまで→不変の契り…「野底浜アユ〈波照間〉」

⑭すんむとぅ（シマオオタニワタリ）の木の曲がり→人間のひねくれた心…「びんに木ユンタ」

⑮まつ（リュウキュウマツ）から唐船の竜骨がとれるまで→不変の契り…「とーがにすざー」

⑯まーに（クロツグ）の心皮〈柔和〉・芭蕉の茎〈白〉→子は生まれながらにして親に似る…

「芭蕉やびちぃジラバ」「いんだれユンタ」

⑰びんにき（オヒルギ）の曲がり→人間のひねくれた心…「びんに木ユンタ」

⑱ふがら（クロツグの葉鞘の基部にできる黒い繊維）→陰毛…「しゃがむやー」

⑲山ざみ（ツルアダン）の幹の節→深い思い（何度も逢いに来て欲しいという気持ち）…「古見ぬ浦節」
⑳やまふくん（ウラジロエノキ）の生長→個人の出世…「マンノウマ節」
㉑やらぶ（テリハボク）　種子の形（転がる）→帰還（親が一人息子の帰りを待つ気持ち）…「やらぶ種子アユー」
〃　木から船材が取れるまで→不変の契り…「野底浜ユンタ（アユ）」
㉒んみ（ウメ）　花の香り→乙女の美しさ…「古見ぬ浦節」
㉓ばそう（リュウキュウバショウ）の株→人間の林立している様…「いしがーぬ金盛ユンタ」
㉔はまさきぶ・はまさでいく（ハマユウ）の色→乙女の体が白く美しい…「南さこだジラマ」「マツニャマ節」
㉕かにふん（エビヅル）の実→女の目…「しゃがむやー」
㉖んがな（ホソバワダン）の苦さ→親の決めた夫…「越地節」

（ロ）人間以外

①あだん（アダン）の柱→貧家…「松金ユンタ」
②くーる（オキナワサルトリイバラ）染め→交接の際の汚れ…「ぼすぼー節」
③じぐ・ずぐ（デイゴ）の花→赤色…「さしぬがんアユ」「松金ユンタ」
〃　柱→貧家…「松金ユンタ」
④むりく（マツリカ）の花→南が星の見…「南が星ユングトゥ」
⑤まつ（リュウキュウマツ）の葉の屋根→豪華な邸宅…「家たかび」
⑥やらぶ（テリハボク）の種子の実り様→粟の豊作…「くいちゃ踊り」
⑦びーる（クワズイモ）→青色の礼服…「松金ユンタ」

⑧ぶー（苧麻）の根の強さ→風根の強さ…「くくる嶽アユ」
⑨ゆしぃきぃ（ススキ）の株→稲の繁茂…「稲が種アヨウ」「波照間島節」
⑩ゆり（テッポウユリ）の花〈白〉→カカンの色…「くいぬぱな節」
⑪んみ（ウメ）の花→乙女の腰巻きの汚れ…「ぼすぽー節」

II　対偶的表現

①赤ようら（デイゴ）の花の咲く時期＝青春の花盛りの時期…「桃里節」
②あこう（アコウ）の根下り→我々皆の根下り場所…「樫木根アユウ」
③あさんぐる（フカノキ）の根下り→我々皆の根下り場所…「樫木根アユウ」
④いしぶ（シマシラキ）の根下り→我々皆の根下り場所…「樫木根アユウ」
⑤かしい（ウラジロカシ）の根下り場所→我々皆の根下り場所…「樫木根アユウ」
⑥たぶ（タブノキ）＝村の乙女の美しさ…「いなま道美らさ」
⑦ふちん（すんむとぅ・シマオオタニワタリ）の根下り→我々皆の根下り場所…「樫木根アユウ」
⑧まつ（リュウキュウマツ）の上に山鳥が寝る＝昔の恋人は我身の上を寝場所とした…「登野城あさばな」
⑨やらぶ（テリハボク）＝村の乙女の美しさ…「いなま道美らさ」

III　有用性によるもの

①あでふ（アデク）→建築〈甥の結婚祝い品〉…「ウンダマリジラバ」
②いじょう（モッコク）→建築…「松金ユンタ」「家たかび」「俘海（ふかい）バナカーバナ筑登之（ちくどぅん）」
③きだ（リュウキュウコクタン）の芯→櫓をはめるもの…「古見山ジラバ」

④きゃんぎ（イヌマキ）→建築…「松金ユンタ」「家たかび」「浮海（よかい）バナカーバナ筑登之（ちくどうん）」
「くんなーべちぃ」
⑤かしぃ（ウラジロカシ）→造船…「たな取りジラバ」「黒島のカンフチィ」「造船のアヤゴ」
「池ぬぶしぃジラバ」「古見山ジラバ」「出船の歌」
⑥くにぶんぎ（ヒラミレモン）の実→珮玉…「北夫婦ぬふにぶ木ユンタ」「はいきだユンタ」
「むすびぬだんごまジラバ」「くいがま節」「竹富ぬぎらちぇーまユンタ〈黒島〉」
「九年母を謡った子守歌〈竹富〉」「なさま屋ユンタ」
⑦あでふ（アデク）→甥の結婚祝い品（建築資材）…「ウンダマリジラバ」
⑧くば（ビロウ）→扇…「ぱいふたフンタカユングトゥ」
〃　→笠…「なゆちゃるむん」「馬乗しゃ」
〃　→玩具三味線の棹…「山原ユンタ」
〃　→馬の鞍…「ままらまユンタ」
⑨こうばなぎ（シマトネリコ）→滑車…西表節祭アンガマの「船」
⑩しんだん（センダン）→嫁入り道具…「昼の子守歌」
⑪するんてぃ（ホソバムクイヌビワ）→造船…「ながなんドゥンタ」
⑫そうぎ（クサトベラ）の枝葉→敷き物…「慶田盛ぬクンチャーマユンタ」「マカルセージラマ」
⑬ふがら（クロツグの繊維）→綱…「二月じらば」「古見山ジラバ」「あーぱーれーの唄」
「だーとだき」「家たかび」

⑭ばそう（リュウキュウバショウ）→綱…「まやユンタ」
〃　　→糸…「ぼすぼー節」
⑮ばんしる（バンジロウ）→みやげ…「西表の子守歌」
⑯むみん（ワタ）→糸をとる…「月夜浜節」
〃　　→手拭…「ぱいふたフンタカユングトゥ」
⑰やまふくん（ウラジロエノキ）→家の桁…「松金ジラバ〈川平〉」
⑱やらぶ（テリハボク）→皿…「伊武田ユングトゥ」
〃　　→ばだす（酒器）…「世果報」「山かしぬアヨウ」
⑲やんだる（やまざみ　ツルアダン）→みやげ…「西表の子守歌」
⑳かにん（エビヅル）→糸…「だとだぎ」
〃　　→家の桁…「松金ジラバ〈川平〉」
㉑かや（チガヤ）→笠〈ちぃとぅべー〉…「ちぃとぅべーユングトゥ」
〃　　→家…「家ぬかざい」「網張ぬみだごうまユンタ」「くんぬてーずユンタ」
〃　　枯れた茅→燃やす…「ばなり焼きアヨー」
〃　　→炬火…「しゃがむやー」
㉒だでぃく（だでぃふ　ダンチク）→編み戸…「あーぱーれの唄」
㉓とぅのー菜（とぅんな　アキノノゲシ）の茎→和え物にして食べる…「兄と妹」
㉔ゆしぃきぃ（ススキ）の枯れたもの→燃やす…「ばなり焼きアヨー」

〃　　↓炬火…「ゆなはは節」「しゃがむやー」

Ⅳ　特性によるもの

①きだ（リュウキュウコクタン）〔上質〕↓箸…牛ぬユングトゥ

②くにぶんぎ（ヒラミレモン）〔芳香〕…「あがろうざ節」「古見や辻ジラバ」「こいなユンタ」「おふにやもい」

③くわ（シマグワ）〔呪的な木〕↓神鳥（霊鳥）が坐す…「仲本アヤグ」

〃　　↓名鼓…「かんた世ユンタ」

④むりく（マツリカ）の花〔芳香〕↓折る口実…「なさま屋ユンタ」「夜の子守歌」

⑤まつ（リュウキュウマツ）〔長寿木〕…「目出度節」

⑥んみ（ウメ）〔花と香り〕…「目出度節」

⑦さでぃふきゃ（ハマユウ）〔材質〕↓弓の的…「んざとぅらじるくぶしユンタ」

⑧だでぃふ（ダンチク）〔聖木〕↓茎に溜まる玉水で撫水をすると新生…「節ジラバ〈川平〉」

⑨まんつぁ（モロコシソウ）〔芳香〕↓乙女の匂い…「すゆりでぃユンタ」「ひゃんだん岳アヨウ」

Ⅴ　情景描写

①あこう（アコウ）…「鷲ユンタ」「山樫根アユウ」

②あだん（アダン）…「黒島口説」「ざん取りユンタ」

③くば（ビロウ）…「鳩間節」「くばぬ葉ユンタ」

④くばでーさ（モモタマナ）…「殿様節」

⑤ぶじぃ（デイゴ）…「東方の後のぶーじぃの上の」
⑥ぶしき（ヒルギ）…「井戸ぬ端ぬあぶだーまユングトゥ」
⑦まつ（リュウキュウマツ）…「とまた松節」「岡ぬ親方ユングトゥ」
⑧むん（ヤマイモ）…「早朝に起きていよ朝ばなぬユングトゥ」「いぐじゃーまユンタ」
⑨ゆうな（オオハマボウ）…「ざんとぅるジラパ」
⑩むりく（マツリカ）の花…「首里子」
⑪まむてぃかんだ（ヒハツモドキ）…「かんた世ユンタ」
⑫ゆり（テッポウユリ）の花…「うろんつぃんぬジラマ」「はぴら（出羽）」

Ⅵ　その他

《祈願》　たぶ（タブノキ）の実の実り様→豊作…「米稔らばユングトゥ」
　　ゆしぃきぃ（ススキ）の根→稲の生育…「川平のカンフチィ」「稲が種アヨウ」「波照間島節」
《誘惑》　とぅんな（アキノノゲシ）…「山崎ぬアブジャーマ節」
　　んがな（ホソバワダン）…「山崎ぬアブジャーマ節」
《時期》　ふぬびゃ（くにぶん　ヒラミレモン）の若芽→公用船の船出…「浦船ジラバ」
《用途》　アディンガー（樫木の果実）の殻…「鳩間ユンタ」
　　ばそう（リュウキュウバショウ）の幹→虫の船…「いしがーぬ金盛ユンタ」
《その他》　かにんき（ハマゴウ）側→隠れ場所…「あかんに田ユンタ」
　　かや（チガヤ）→隠れ場所…「あかんに田ユンタ」

かや枯れ→旱魃の指標→雨乞い…「すばんがーにカンフチィ」
すでぃち（ソテツ）の側→雨宿り…「イダフンユングトゥ」
すんなー（すんむとぅ　シマオオタニワタリ）→曲がり…「あーぱー石ユングトゥ」
ゆしき（ススキ）の側→雨宿り…「イダフンユングトゥ」
〃　　下→隠れ場所…「ナカマイジラバ」
〃　　陰→隠れ場所…「あかんに田ユンタ」
んにん（くにぶん　ヒラメレモン）の実→食物…「まーんにんてぃ節」

以上の分類はあくまで便宜的なものであるが、これによって八重山歌謡に植物がどのように取り入れられているかというおおよその傾向は把握できるであろう。

おわりに

本稿では、八重山歌謡に見える植物のうち名称の見えるものを可能な限り拾い上げるようにつとめたが、稲・粟・麦・芋・豆などの穀物や、すびら（韮）・いらっきょう・しぶる・なべらなどの食料として栽培される植物は、紙数その他の理由から今回は割愛した。

なお、「〇〇木（竹）」と出てくるものの中には植物名とは限らないものが含まれている。例えば「かばさ木」は「九年母木」の対句で「香ばしい木」の意味であり、与那国の「だとだぎ」（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』一一三頁）に見える「なんだ木」「くんがに木」は、それぞれ白銀木、黄金木の意味であることは明確であるが、「うぶんく木」の「うぶんく」は、福里武市・宮良保全・冨里康子『与那国民謡工工四』によれば地名であり、川

平のカンフチィ（『南島歌謡大成　Ⅳ八重山篇』二七頁）に出てくる「かーばた木」も言葉からして「川端に生えている木」のようにも思われる。このように見てくると、「こーでー木」（川平のカンフチィ）や「ちんどり竹」（「だとだぎ」）も必ずしも特定の植物の名称ではない可能性もある。したがってここではあえて取り上げなかった。また波照間のわらべ歌「いなま道ちゅらさ」（『日本民謡大観　八重山諸島篇』五四頁）には、

あぶし道美らさ　　畦道が美しいのは
しらふ木ぬ美らさ　　しらふ木が美しい
東村美童　　名石村の乙女は
色ぬ美らさ　　色がきれいだ

とあり、ここに「しらふ木」が見えるが、これは恐らく白い稲穂のことを表現したもので、特定の木の名称ではないであろうと判断し、見送った。

しかし植物名と推定されるもので、同定が困難なものもある。波照間の「ナカマイジラバ」（『八重山古謡』下巻六五二頁）に出てくる「うきじ木」「ぱぱら木」もその一つである。この古謡の内容は、ナカマイと称する女子が山に薪を取りに出かけ、偶然に出会った昔の恋人に誘われて、「うきじ枝　ぱぱら枝　折りゃ持ち」海岸にある宿に行き、その木の枝を敷いてその上で昔のことを語りあったというものである。『八重山古謡』の対訳では、「ウキジと称する潅木の枝を　パパラ木の枝を　折り持って」となっているが、「うきじ木」や「ぱぱら木」という方言名の樹木は見あたらない。敷物にしたということでは、「そうぎ」すなわちクサトベラと同じであるが、クサトベラを方言で「うきじ」というところはない。「うきじ」はあるいは「うぎち」の誤りであろうか。もしそうであるとすれば、和名クマツヅラ科のタイワンウオクサギ、学名 Premna corymbosa Rottb.& Willd.var.obusif

olia Fletcher の、海岸近くの隆起サンゴ礁地域に多く見られる常緑の亜高木に同定される。ただこの木はクサギすなわち臭い木ともいわれる程、葉は臭気が強いことから、その上で昔のことを語りあったという古謡の内容にそぐわない。一方「ばばら」という語は、羽のようにひらひら動くものの意味であるから、「ばばら木」は実際の木の名称ではなく、そうした特徴の木を「ばばら木」と呼んだのかも知れない。いずれにしても「うきじ」「ばばら」は同定するのは至らなかった。与那国の「ながなんドンタ」に出てくる「すがる木」も、同定する手がかりはない。

参考文献

【歌謡関係】

喜舎場永珣『八重山民謡誌』（沖縄タイムス社、一九六七年）

喜舎場永珣『八重山古謡』上巻・下巻（沖縄タイムス社、一九七〇年）

喜舎場永珣『八重山民俗誌』上巻・下巻（沖縄タイムス社、一九七七年）

宮良賢貞『八重山芸能と民俗』（根元書房、一九七九年）

仲宗根幸市『琉球列島 島うた紀行〈第二集〉八重山・宮古諸島』（琉球新報カルチャーセンター、一九九八年）

外間守善・宮良安彦『南島歌謡大成 Ⅳ八重山篇』（角川書店、一九七九年）

日本放送協会編『日本民謡大観 八重山諸島篇』（日本放送出版協会、一九八九年）

宮良当壮『八重山古謡』（『宮良当壮全集』11所収、第一書房、一九八〇年）

宮良当壮〈歌謡論考〉（『宮良当壮全集』11所収、第一書房、一九八〇年）

上勢頭亨『竹富島誌 歌謡・芸能篇』（法政大学出版局、一九七九年）

『竹富町古謡集』（竹富町教育委員会、一九八一年）
『石垣村古謡集』（石垣字会、一九八五年）
『登野城村古謡集』（登野城ユンタ保存会、一九九二年）
野底宗吉『新城下地島の節祭ジラバ集』（新城下地島を守る会、一九八八年）
浦原啓作『八重山ユンタ集』（音楽之友社、一九七〇年）

【植物関係】

高嶺英言「八重山植物の研究Ⅰ～Ⅲ」（同人誌、一九三八年、後に天野鉄夫氏により再版、一九七七年）
初島住彦・天野鉄夫『琉球植物目録』（でいご出版、一九七七年）
初島住彦・天野鉄夫『増補訂正 琉球植物目録』（沖縄生物学会、一九九四年）
天野鉄夫『琉球列島植物方言集』（新星図書、一九七九年）
初島住彦『琉球植物誌』（沖縄生物教育研究会、一九七五年）
多和田真淳監修・池原直樹『沖縄植物野外活用図鑑』（新星図書、一九七九年）
照屋照和『沖縄有用樹木資料』（自家版）
『与那国島の植物』（与那国町教育委員会、一九九五年）